

第 18 回

# 神奈川県遺跡調査・研究発表会

## 発表要旨



1994（平成6）年9月25日（日）

於 横浜市開港記念会館

**主催** 神奈川県考古学会  
**共催** (財)かながわ考古学財団  
**後援** 神奈川県教育委員会

# 神奈川県遺跡調査・研究発表会発表目次

## I 開 会

## II 発 表 (午前の部)

1. 大和市月見野遺跡群上野遺跡第5・6地点 …………… 滝澤 亮・小池 聡 1
2. 第一東海自動車道No.14 (三ノ宮・下谷戸) 遺跡  
…………… 宍戸信悟・立川直之・松田光太郎・三瓶裕司 5
3. 南足柄市塚田遺跡 …………… 安藤文一 9
4. 平塚市原口遺跡 …………… 長谷川厚・長岡文紀 13
5. 横須賀市大塚古墳群 (吉井・池田地区遺跡群内)  
…………… 玉口時雄・大坪宣雄・北爪一行 17
6. 横浜市大場横穴墓群F・G・H横穴墓群の調査  
…………… 大川 清・吉田好孝・渡辺 務 21

## III 記 念 講 演

- 「南関東テフラから見た天変地異期」 …………… 都留文科大学教授 上杉 陽 25

## IV 発 表 (午後の部)

7. 川崎市下麻生古墳群 …………… 北原實徳 31
8. 海老名市国分尼寺北方遺跡 (第7・8次調査)  
…………… 伊東秀吉・大坪宣雄・荻上由美子・小林克利 35
9. 茅ヶ崎市居村B・前ノ田遺跡 …………… 富永富士雄 39
10. 鎌倉市若宮大路周辺遺跡群 …………… 田代郁夫・原 廣志・佐藤仁彦 43
11. 小田原市本町・小田原城三の丸堀の調査 …………… 戸田哲也・小林義典 47

## V 閉 会

(表紙の写真は平塚市原口遺跡の方形周溝墓群)

# 1. 大和市月見野遺跡群上野遺跡第5・6地点

滝澤 亮・小池 聡

- 1. 所在地** 大和市つきみ野一丁目4-5、6（第5地点）、つきみ野一丁目5-2、4、7（第6地点）
- 2. 調査主体** 上野遺跡第5・6地点発掘調査団（団長 滝澤 亮）
- 3. 調査担当者** 小池 聡
- 4. 調査目的** 第5地点：社員寮建設に伴う事前調査、第6地点：共同住宅建設に伴う事前調査
- 5. 調査期間** 第5地点：平成4年7月2日～12月19日（整理調査・平成5年4月1日～12月31日）  
第6地点：平成5年5月20日～11月15日（整理調査・平成5年11月15日～平成6年8月15日）
- 6. 調査面積** 第5地点：約5,200㎡（旧石器時代調査面積約790㎡）  
第6地点：約3,787㎡（旧石

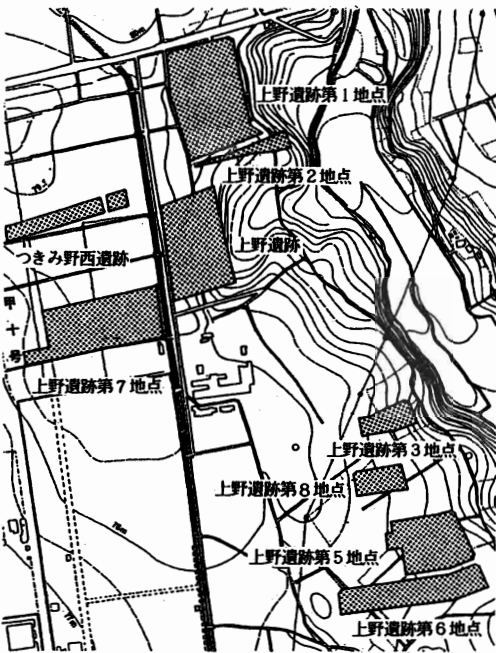
器時代調査面積約859㎡）

## 7. 遺跡の立地

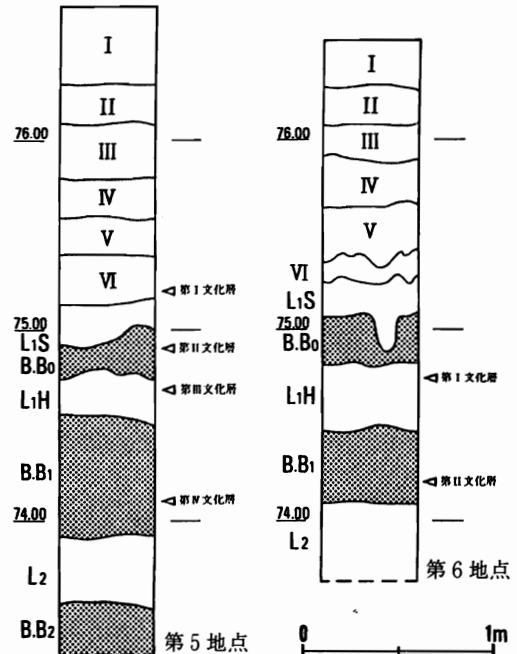
月見野遺跡群上野遺跡第5・6地点は、田園都市線つきみ野駅の南約700mに位置している。本遺跡群のある大和市は神奈川県ほぼ中央部にあって、相模野台地の東縁部に立地している。大和市域は市の東側を流れる境川と西側を流れる引地川に画されている。学史的に著名な本遺跡群は、市域の東側を流れる境川の支流である目黒川流域両岸に展開する広大な遺跡群で、本遺跡第5・6地点は、目黒川西岸で、月見野遺跡群の最も南に位置している。周辺は、つきみ野地区開発の際の造成工事により大幅に地形が変えられているが、両地点は山林として保存されていたため、辛うじて旧地形を留めていた。目黒川までは約100mで、標高約76mである。両地点とも目黒川に向かって穏やかに傾斜している。

## 8. 調査の概要

調査団では、月見野遺跡群上野遺跡の今回報



第1図 調査地点の位置図（『大和市遺跡地図』加筆作成）



第2図 第5・6地点基本層序

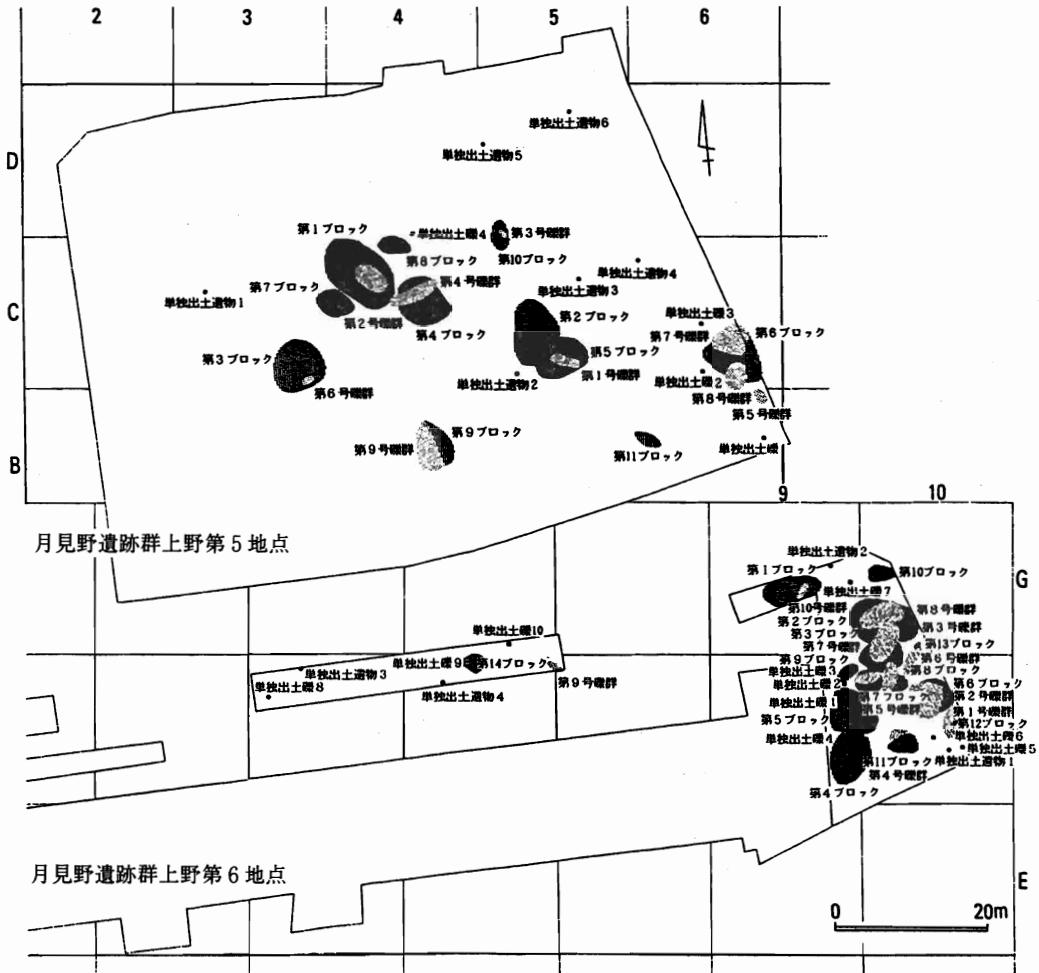
告する第5・6地点の他、第7・8地点の発掘調査を行っている。第5・6地点と同様に奈良・平安時代の竪穴住居址群、掘立柱建物址群が検出されており、上野遺跡には広範囲に該期の集落址が展開していることを確認し、大きな成果を得ているが、今回は縄文時代草創期・旧石器時代の成果を報告する。

**第5地点第I文化層** 黒色土層下部の第IV～V層中から検出されたブロック1基、単独出土遺物2点から構成される文化層である。調査範囲内に散漫にブロックと単独出土遺物が分布している。出土した石器は、有舌尖頭器1点、槍先形尖頭器1点、剥片1点、碎片1点の計4点である。有舌尖頭器は凝灰岩製、槍先形尖頭器は安山岩製である。本文化層は隆起線文土器など

の土器は出土しなかったが、層位的には縄文時代草創期に比定される文化層である。唯一検出されたブロックも有舌尖頭器と剥片によって構成される小規模なものである。

**第5地点第II文化層** 黒色土層下部の第IV層からB<sub>1</sub>上部までで検出されたブロック1基、礫群2基、単独出土礫1点により構成される文化層である。礫群の出土層位から、B<sub>1</sub>中に生活面を持つものと考えられる。各遺構の平面分布は調査範囲内の南東隅に集中している。

出土した石器群は槍先形尖頭器1点、細石刃核4点、楔形石器1点、石核1点、剥片16点、碎片6点の計29点である。本文化層は黒曜石製細石刃核が安山岩製槍先形尖頭器と共に出土したもので、形態は野岳・休場型のものである。



第3図 第5地点第III文化層と第6地点第I文化層

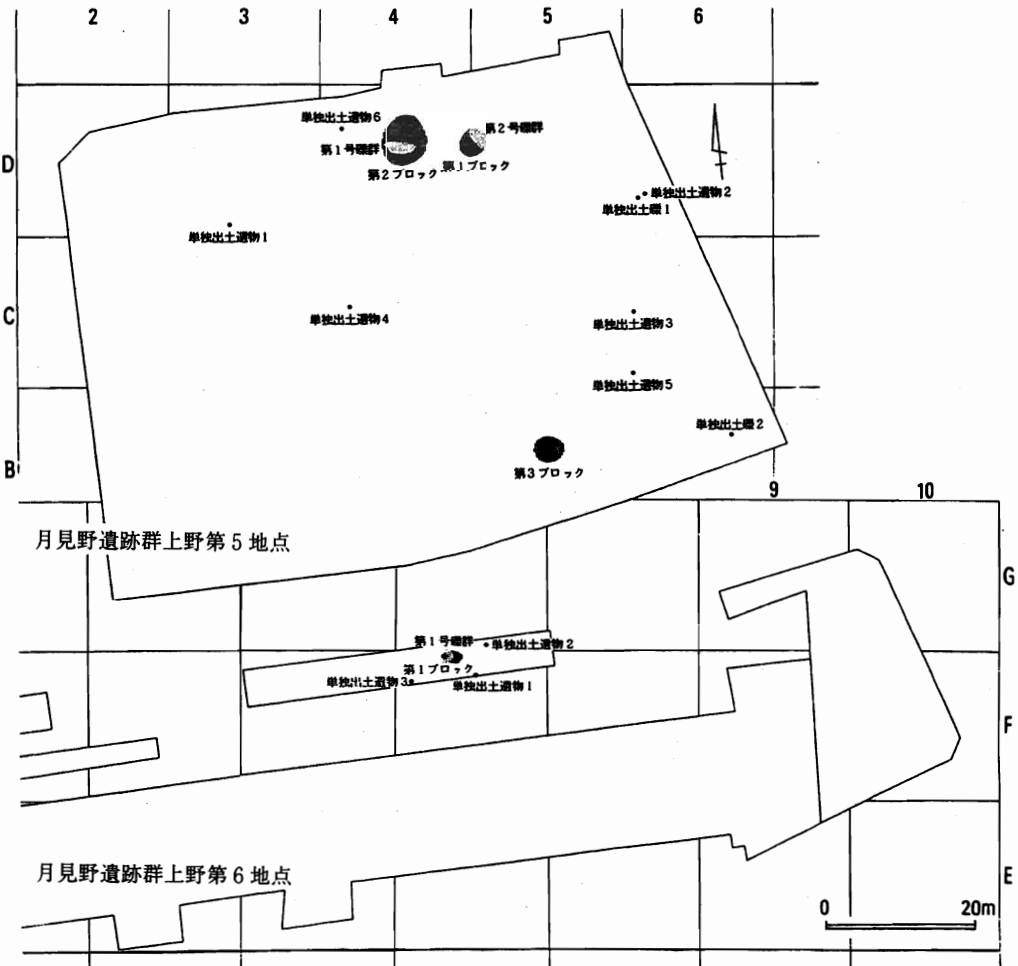
組成内には細石刃は含まれておらず、遺跡内では細石刃製作は行われてはいない。組成内に単独固体で槍先形尖頭器を含んでおり、細石刃核の石材も黒曜石製であるので、やや古い所に位置付けられるであろう。

**第5地点第Ⅲ文化層** 黒色土層下部の第Ⅳ層からB<sub>1</sub>・B<sub>1</sub>上部までで検出されたブロック11基、礫群9基、単独出土遺物6点、単独出土礫4点によって構成される文化層である。集中度の高いブロックとやや散漫に集中する礫群が調査範囲の中央部から東側に密集して分布している。礫群の出土層位から生活面はL<sub>1</sub>H上部からL<sub>1</sub>H上面に当ると考えられる。ブロック内・ブロック間・礫群内・礫群間それぞれに接合資料が認められる。

出土した石器は、槍先形尖頭器26点、ナイフ形石器3点、削器1点、礫器4点、敲石1点、磨石4点、二次加工痕を有する剥片52点、使用痕を有する剥片13点、剥片444点、碎片476点の計1,040点である。

槍先形尖頭器には、両面調整・片面調整・周縁加工の各形態が認められる。また、石材は安山岩、凝灰岩、頁岩、黒曜石を用いており、頁岩製のものが多く、尖頭器製作時に作出される調整剥片なども頁岩製のものが多い。

組成内には尖頭器未製品や調整剥片を含んでおり、また、接合資料にも尖頭器未製品と調整剥片、碎片などの接合資料が認められるので、遺跡内で尖頭器製作が行われたと判断できる。また、尖頭器製作技術には、人頭大の原石を2



第4図 第5地点第Ⅳ文化層と第6地点第Ⅱ文化層

～3枚程度の厚い大型剥片に分割して両面調整加工を施して製品とするものや小型剥片の周縁に加工を施して製品とするものなどが認められる。

本文化層は後述する第6地点第I文化層と接合資料が存在し、同一個体も複数存在しているため、同一文化層を形成すると考えられる。

**第5地点第IV文化層** L<sub>1</sub>H下部～L<sub>2</sub>上部から検出されたブロック3基、礫群2基、単独出土遺物6点、単独出土礫2点から構成される文化層である。集中度の希薄なブロック・礫群が調査範囲内に散漫に分布している。検出された礫群の出土層位から本文化層の生活面はL<sub>2</sub>上面からB<sub>1</sub>B<sub>1</sub>下部であると考えられる。

出土した石器群は、ナイフ形石器3点、尖頭器1点、錐器1点、剥片12点、碎片2点の計19点である。

出土したナイフ形石器は石刃素材で二側縁加工のものであるが、やや小型化したものである。

**第6地点第I文化層** 黒色土層下部の第V層からB<sub>1</sub>B<sub>1</sub>上部までで検出されたブロック14基、礫群10基、単独出土遺物4点、単独出土礫10点から構成される文化層である。検出された礫群の集中層位から本文化層の生活面はL<sub>1</sub>H上部～上面に当たると考えられる。

本文化層の各遺構は密集度の高いブロック・礫群が調査範囲内全面に集中して検出された。ブロック内・ブロック間・礫群内・礫群間で豊富な接合資料が認められる。ブロックには礫群が内在するように分布している。

本文化層の石器群は、槍先形尖頭器27点、ナイフ形石器2点、細石刃5点、礫器4点、台石7点（1点の破損）、二次加工痕を有する剥片28点、使用痕を有する剥片14点、剥片559点、碎片501点の総点数1,152点である。

前述した様に本文化層は第5地点第III文化層とは接合資料が存在し、同一個体資料を共有しており同一文化層と判断できる。本文化層の石器群は第5地点第III文化層同様、槍先形尖頭器を主体とする石器群で、槍先形尖頭器の形態もやや細身の木葉形尖頭器を含んでいるが類似しており、両地点の尖頭器を合わせるとほぼ全ての形態の尖頭器が揃うと言っても過言ではない。

ただ、本文化層石器群組成内には、単独個体であるが黒曜石製細石刃を含んでおり、両地点の石器群には細石器を伴っている可能性がある。

**第6地点第II文化層** B<sub>1</sub>B<sub>1</sub>中位からB<sub>1</sub>B<sub>1</sub>下部から検出されたブロック1基、礫群1基、単独出土遺物3点から構成される文化層である。礫群の集中する層序から本文化層の生活面はB<sub>1</sub>B<sub>1</sub>下部に当たると考えられる。各遺構は旧石器時代調査範囲西側に偏って、小規模なブロック・礫群が検出されたに過ぎない。

出土した石器群は、ナイフ形石器4点。槍先形尖頭器2点、二次加工痕を有する剥片1点、剥片1点、碎片1点の計13点である。石材は剥片を除いていずれも黒曜石製である。

本文化層は前述した第5地点第IV文化層と近い時期もしくは同一文化層を形成するものと判断されるが同一個体資料や接合資料は確認できなかった。

## 9. まとめ

第5・6地点は発掘調査の都合上地点が別れてしまったが、本来は同一地点を形成していたもので、特に、第5地点第III文化層と第6地点第I文化層は両地点間で接合資料や同一個体資料が存在しており、同一文化層と判断できるものであった。また、第5地点第IV文化層と第6地点第II文化層も同一個体資料や接合資料は存在していないものの、層位的には極めて近い時期か若しくは同一文化層を成すものと判断できるものであった。

特に、第5地点第III文化層・第6地点第I文化層はL<sub>1</sub>H上部～L<sub>1</sub>H上面に生活面を持つ、尖頭器石器群で、編年的には相模野第V期（鈴木・矢島 1978）・段階Ⅷ（諏訪間 1988）に比定できるもので、密集度の高いブロック・礫群が集中して分布し、直径約100m程度の大規模な環状分布を呈している。月見野遺跡群では本遺跡の別地点の第1（相田ほか 1986）・2地点（戸田ほか 1984）や第ⅢA・ⅢD・ⅣA遺跡（月見野遺跡群調査団 1969）でL<sub>1</sub>H中より尖頭器石器群が検出されており、この時期に目黒川の両岸を占地して尖頭器製作を行いながら大規模な遺跡群を営んでいたことが推定される。

## 2. 第一東海自動車道No.14（三ノ宮・下谷戸）遺跡

宍戸信悟・立川直之・松田光太郎・三瓶裕司

1. 所在地 伊勢原市三ノ宮1,094他
2. 調査主体 神奈川県立埋蔵文化財センター  
(財)かながわ考古学財団
3. 調査担当者 宍戸信悟・立川直之・松田光太郎・三瓶裕司
4. 調査目的 第一東海自動車道改築に伴う  
事前調査
5. 調査期間 平成4年6月26日～平成6年  
6月10日
6. 調査面積 3,620㎡
7. 遺跡の立地

本遺跡は伊勢原市の中央部、小田急線伊勢原駅から北へ約2kmの所に位置する。地形的にみると伊勢原台地の西端、丹沢山塊から南東方向に延びる細長い低台地上に立地している。標高は50～54m前後である。本遺跡の南側には大山から流れ出た鈴川が蛇行しながら流れている。また北側には初川と呼ばれる小さな川が流れる浅い谷が広がっていて、この川がその昔鈴川の本流であったと考えられている。

現状では、台地中央を南北に貫く県道と東西に横切る第一東海自動車道（通称東名高速道路）によって4分割されているが東西400m、南北1kmの台地上全域に及ぶ広大な遺跡である。本遺跡は、これまでも三ノ宮・下谷戸配石遺構群として、東名高速道路建設に先立って昭和40～42年にかけて発掘調査が実施された。その結果、縄文時代後期の敷石住居址や配石遺構などが調査され、現在三ノ宮・比々多神社境内に移築されている。また本遺跡の北西側400m程の所には微隆起線文土器を出土した三ノ宮・宮ノ前遺跡が位置する。

### 8. 調査の経緯

神奈川県立埋蔵文化財センターでは、平成2年度より第一東海自動車道改築に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してきた。今回報告するのは、その内の伊勢原市内で調査されたNo.14遺跡についてである。

東名高速道路は本遺跡を東西に貫いているが、



第1図 遺跡位置図

今回調査は本線の両側拡幅部分および新設側道部分を対象とするもので対象面積は9,280㎡である。これまでに調査を実施したのは、県道上粕屋・南金目線の交差点付近から南側の鈴川寄りまでの範囲であるが、調査範囲が南北に長く上下線に跨がっているため、調査の進展に伴って第2図の様に区分して実施してきている。

### 9. 調査の概要

本遺跡は旧石器時代から近世まで各時代にわたって多数の遺構や遺物を出土しているが、今回は特に約200点もの有舌尖頭器を出土した縄紋時代草創期の石器製作址について報告する。

なお、平成6年6月までの調査によって発見された遺構は下記の通りである。

旧石器時代：細石刃石器群遺物集中地点4

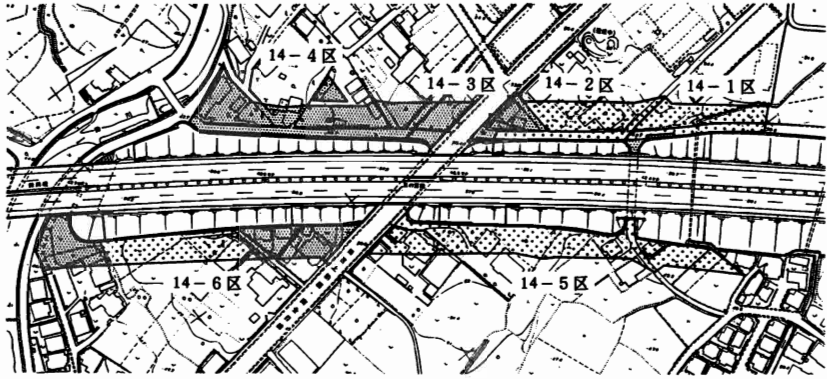
縄紋時代：草創期遺物集中地点10、土坑1、礫群1、後期敷石住居址3、堅穴住居址2、配石遺構4、環礫方形配石1、炉址2、埋甕2、集石1、土坑7

弥生末～：堅穴住居址8、掘立柱建物址1、古墳時代 円形周溝墓3、方形周溝墓11、土坑4、ピット群

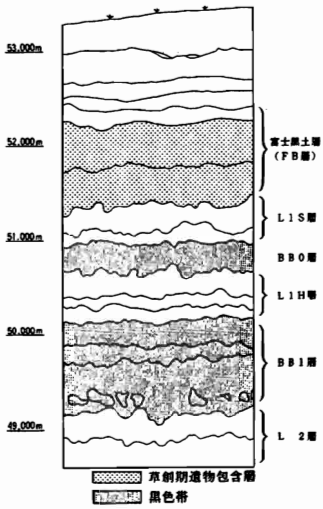
平安時代：円形土坑17

近世：堅穴状遺構1、掘立柱建物址1、土坑27、溝状遺構5、井戸址1

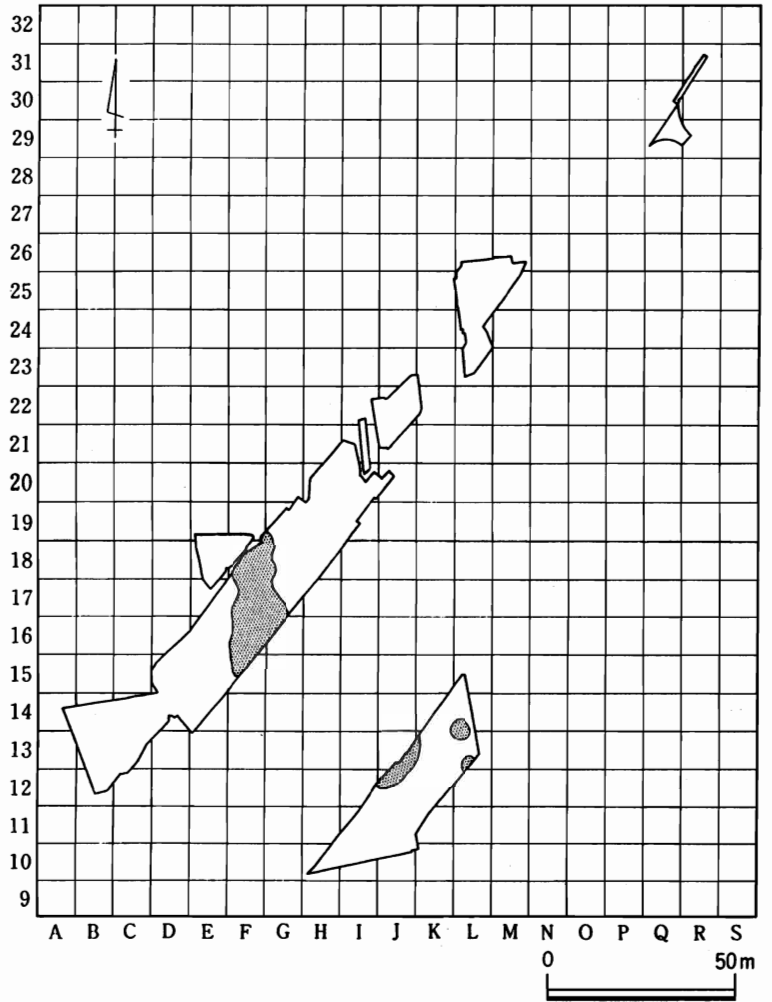
本遺跡は、現在も継続して調査実施中であるため、この数は変動する可能性がある。



第2図 No.14遺跡全体図

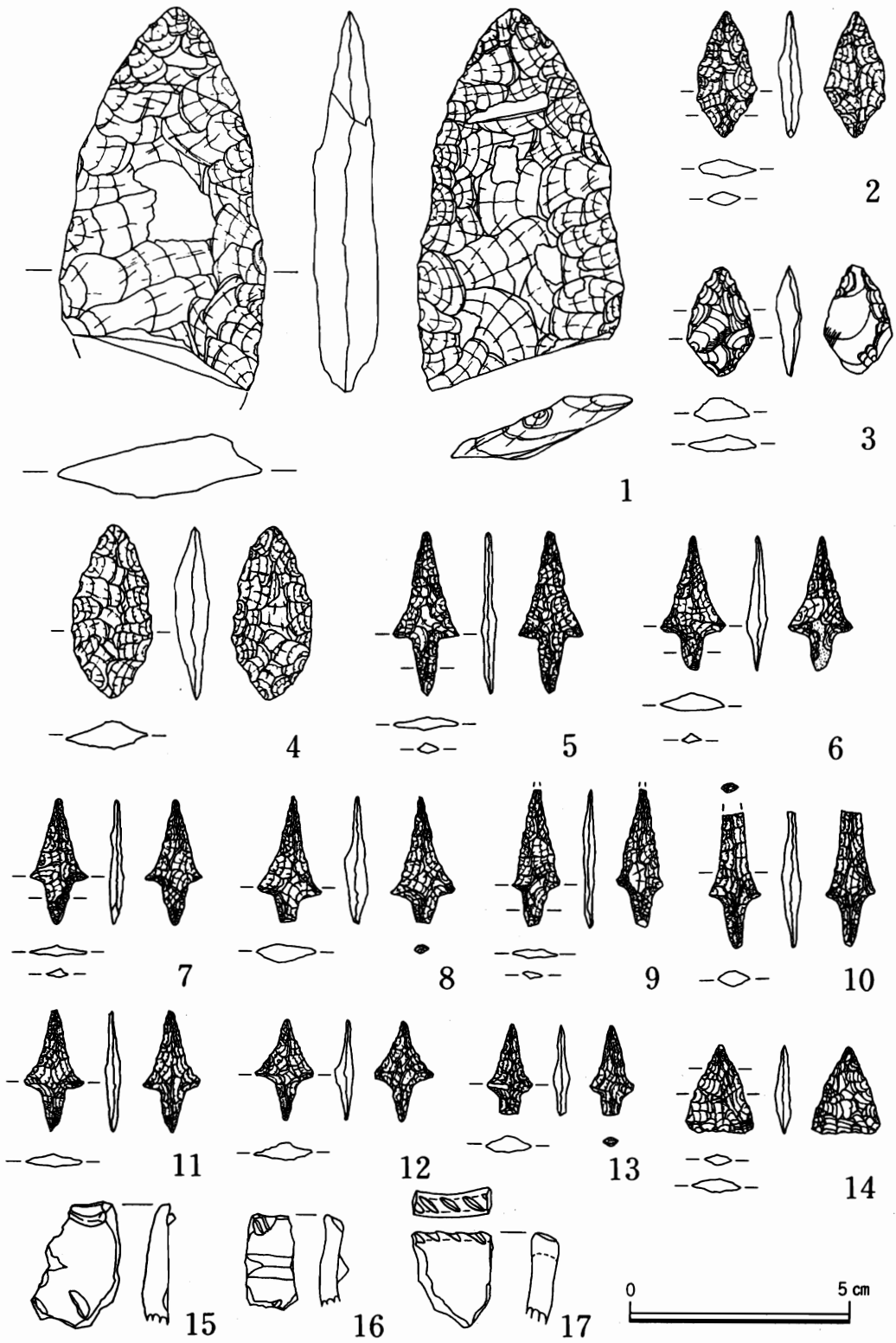


第3図 基本層序



第4図 縄紋時代草創期遺物集中地点分布図





第5図 第一東海自動車道No.14遺跡出土石器・土器

## 縄紋時代草創期の遺構と遺物

縄紋時代草創期の遺物は、14-2・3区ではまったく発見されず、一部深掘りを実施するとどまっていた。しかし、14-4区の新設側道部分の調査を実施している際に、近世溝の覆土中から槍先形尖頭器が発見された。そこで、数箇所を深掘りを設定して調査したところ、F-17グリッドで剥片類が集中して発見されたため、周辺を順次掘り下げて調査を行った。なお、調査範囲が狭いため一部安全上調査できなかった部分があるがH列より西側はほぼ全域を調査し、東側についてはテスト・ピットによってその存否を確認している。14-6区ではほぼ全域を調査することが出来た。

### ・14-4区（第4図）

草創期の遺物は台地中央部から鈴川寄りにかけての、D~I-14~21グリッドから出土している。その内、最も集中して出土したのがF・G-15~19グリッドで、東西10~15m、南北35m以上の範囲に、帯状に濃密に出土している（第4図）。

層位的には、大きく3層に区分できる富士黒色土（FB）層の中層より下層にかけて出土していて、かなり上下に幅のある出土状況が認められた。全体にかなり遺物が浮いているために、集中範囲の特定は困難であるが、5ヶ所程度を想定している。

遺構としては、L1S層上面において土坑が1基発見された。規模は2.5×1.7m、深さ1.2mを測り、平面形長楕円形を呈している。性格は不明であるが、覆土中より32点もの有舌尖頭器、槍先形尖頭器が出土している。

またF-16グリッドのFB層最下部において礫群が発見された。これは拳大から人頭大の台石、凹み石、磨り石、叩き石、円礫等によって構成されている。礫面の赤化および焼土や炭化物等の集中はみられない。

本地区より出土した石器は、有舌尖頭器198点、槍先形尖頭器26点と共に、石鏃1点、楔形石器2点、削器14点、局部磨製石斧1点、打製石斧2点、礫器18点、台石、叩き石等がある。またこれらの製作に関わる大量の剥片類や、隆起線文などの土器片51点も出土した。これらの

遺物の総点数は、さらに下層から出土している細石刃石器群を含めて20,503点を数える。石材はほとんど安山岩系の石材により構成されており、4~5%の凝灰岩、また若干のグリーン・タフなどが混ざる。

図示した遺物はすべて14-4区から出土したものである。第5図1~4は槍先形尖頭器であり、1は安山岩系ホルン・フェルス製でL1S層出土、2は安山岩製で土坑内出土、3は凝灰岩、4は安山岩製でいずれもFB層より出土している。5~13は有舌尖頭器で、5・7・9・10・12は安山岩、6・13は凝灰岩製、8・11は珪質緻密凝灰岩製である。14は珪質緻密凝灰岩の石鏃である。15~17は隆起線文土器である。5~17はすべてFB層中から出土した。

### ・14-6区

下り線側では草創期の遺構は発見されなかったが、遺物は台地中央部のJ~L-12~14グリッドから出土している。遺物の集中は5ヶ所所で認められ、特にJ-12グリッドでは微細な土器片の集中が認められ注目される。出土遺物としては、有舌尖頭器、削器、石鏃、ハード・ハンマー、礫器、土器片などを含み383点を数える。石材は14-4区とほぼ似た様相を呈し、安山岩系の石材を主体としているが、その他の石材では、凝灰岩よりもチャートの占める割合が高くなっている。

この地区では、14-4区に比べ、各集中地点の範囲が狭く、また出土遺物は剥片類の数が非常に少ない割に、礫器やハード・ハンマーの類が多いということが特徴と言える。

## 10. まとめ

有舌尖頭器石器群の遺物集中範囲は、中央部を貫く東名高速道路本線の下へも広がっているものと推定され、当該期の石器製作址としては非常に大規模なものである。今後石器製作システムなどを考える上で重要な資料になるであろう。また大量に出土している剥片類を接合することによって石器製作技法等も解明していきたい。さらに、14-4区と14-6区は東名高速道路を挟んで約50mも離れており、石器組成の様相も異なってくる事から、この2地点の関係も検討してその性格を明らかにしていきたいと考えている。

### 3. 南足柄市塚田遺跡

安藤 文一

1. 所在地 南足柄市関本字塚田569番地  
先
2. 調査主体 塚田1号墳遺跡発掘調査団
3. 調査担当者 安藤文一
4. 調査目的 大雄山駅前再開発事業のビル  
建設に伴う事前記録調査
5. 調査期間 試掘調査 平成4年11月16日  
～平成5年3月14日  
一次調査 平成5年3月15日  
～平成5年11月3日  
二次調査 平成6年1月25日  
～平成6年5月31日
6. 調査面積 約4,000㎡
7. 遺跡の立地

本遺跡は、小田原市と南足柄市を結ぶ伊豆箱根鉄道大雄山線の終着駅となる大雄山駅前に位置するが、ここは曹洞宗の名刹である大雄山最乗寺の玄関口として信者や観光客の利用が多いところである。遺跡周辺の標高は約48mを計るが、足柄平野を貫流する酒匂川の一支流である狩川の左岸にあたり、狩川河床面との比高差はわずかに6mほどを計測する低位丘陵上に立地している。また、東側を狩川の小支流である貝沢川によって開析されている本丘陵には従前塚田古墳群が周知されており、遺跡北東方約50mの隣接地点では昭和35年に赤星直忠・加藤誠夫氏らによって環頭太刀・直刀・挂甲札・輪鏝・玉類・須恵器など貴重な遺物を数多く出土した後期古墳が確認されている。

#### 8. 調査の経緯

遺跡周辺はほとんど宅地化されているところであったが、今回大雄山駅前地区市街地再開発組合による再開発事業に伴うヴェルミ第2棟ビルの建設計画に起因して県文化財保護課による遺跡範囲確認調査が実施され、古墳の石室と思われる大形礫の集積地点と下層より縄文時代の包含層を検出した。このためより詳細な内容を知る目的で本調査団による範囲を広げた試掘調査・本調査へと移行したものである。

#### 9. 調査の概要

今回の発掘調査によって検出された遺構・遺物は多岐にわたったものであるが、古墳の石室を破壊・廃棄したものと断定された大形礫の集積地点や中・近世期の氾濫小河川、これらに伴出した弥生式土器・須恵器・土師器・青磁・陶磁器等を除けば、すべて縄文時代中期前葉から後期前葉に位置づけられるものである。なお、遺跡の基本層序は、第Ⅰ層が近・現代の水田耕作土となる淡黄茶褐色粘質土層であるが、一部上層に黄褐色粘土層を客土している地点もあった。第Ⅱ層の茶褐色スコリア質土層は水田耕作以前の旧表土層である。第Ⅲ層黒褐色スコリア質土層、第Ⅳ層暗茶褐色スコリア質土層、第Ⅴ層明茶褐色スコリア質土層となるが、第Ⅳ・Ⅴ層は弥生～古墳時代の包含層と考えられ、表土下約1.5mの深度になる。第Ⅵ層暗茶褐色スコリア質土層、第Ⅶ層暗褐色スコリア質土層は主に縄文時代の包含層とされ、第Ⅷ層淡茶褐色粘質土層には主要な配石遺構群が存在している。下部は富士黒土層（FB）に相当する第Ⅸ層黒褐色粘質土層から第Ⅹ層明褐色粘質土層をへて深さ約2mほどで地山ローム層になる。

#### （遺構）

検出された遺構を列記しておく、柄鏡形敷石住居址3棟、柄鏡形竪穴住居址（柄部敷石）4棟、柄鏡形竪穴住居址（敷石なし）2棟、竪穴住居址18棟、配石遺構群約50群、列石遺構・帯状小礫群各1群、埋甕・伏甕約20基、屋外炉15基、土壇・土壙墓・配石墓約150基、ピット多数等になる。このうち、注目しておきたいものは柄鏡形敷石住居址と柄鏡形竪穴住居址の形態的な在り方についてである。柄鏡形敷石住居址は3棟とも炉址から入口施設と理解される柄部にかけて敷石の見られるもので、伊勢原市三ノ宮等で類例が知られるものの、全面に敷石を施さないやや特殊なものである。柄鏡形竪穴住居址には柄部のみに配石様敷石を行う場合と敷石を全く認めず床面と同様の硬化面が連続する



第1図 SI-02実測図

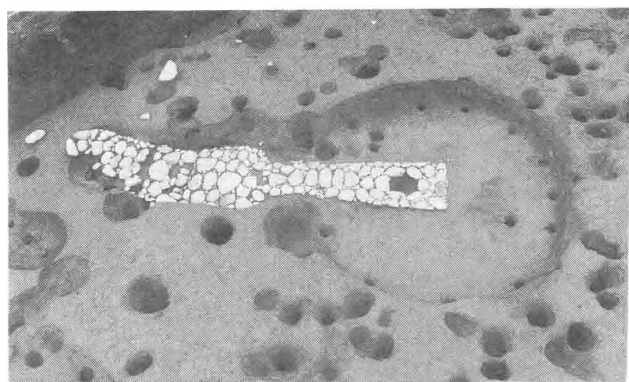


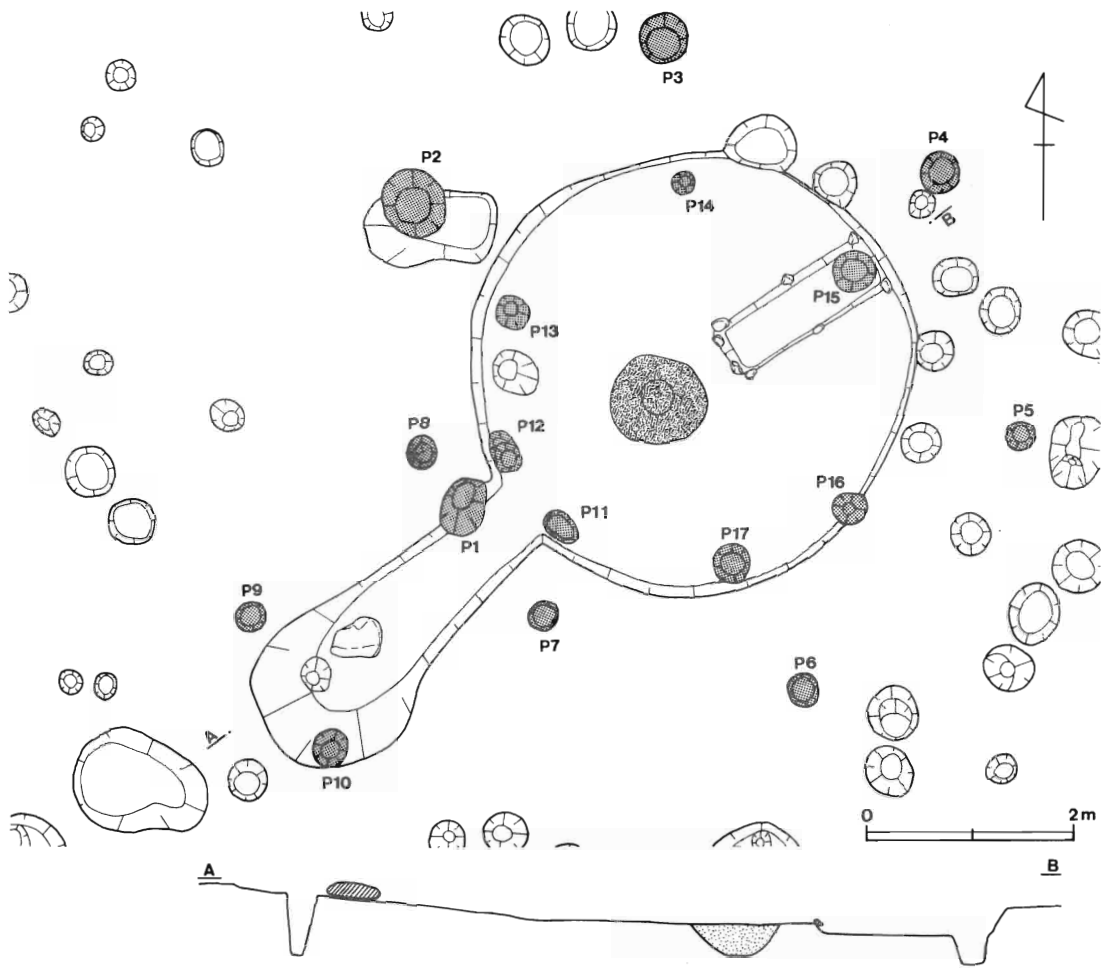
写真1 SI-02

ものがあり、前者は石囲炉で後者が素掘炉となるのが特徴である。しかし、上屋構造については類似していたようで、竪穴内壁柱穴と外柱穴が同心円状に並び、柄部に沿って入口上屋を支えた柱穴列が確認されている。これら住

居址の時代的変遷については今後細部の検討を加えたうえで改めて公表することにしたが、いずれにしても中期後葉～後期前葉の該地域における住居形態を見ていくためには、非常に興味深い課題を含んでいるものと言える。

写真2 調査区北半部全景





第2図 S I-08実測図

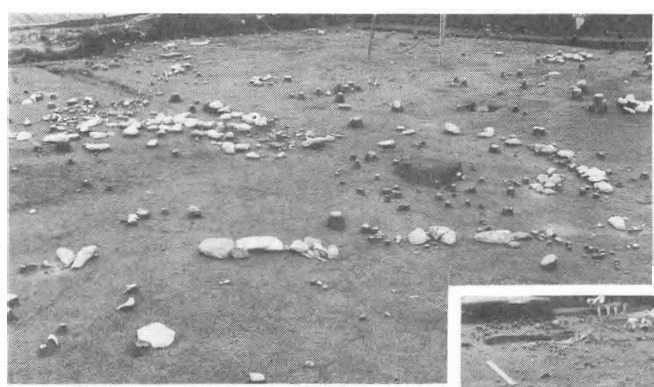


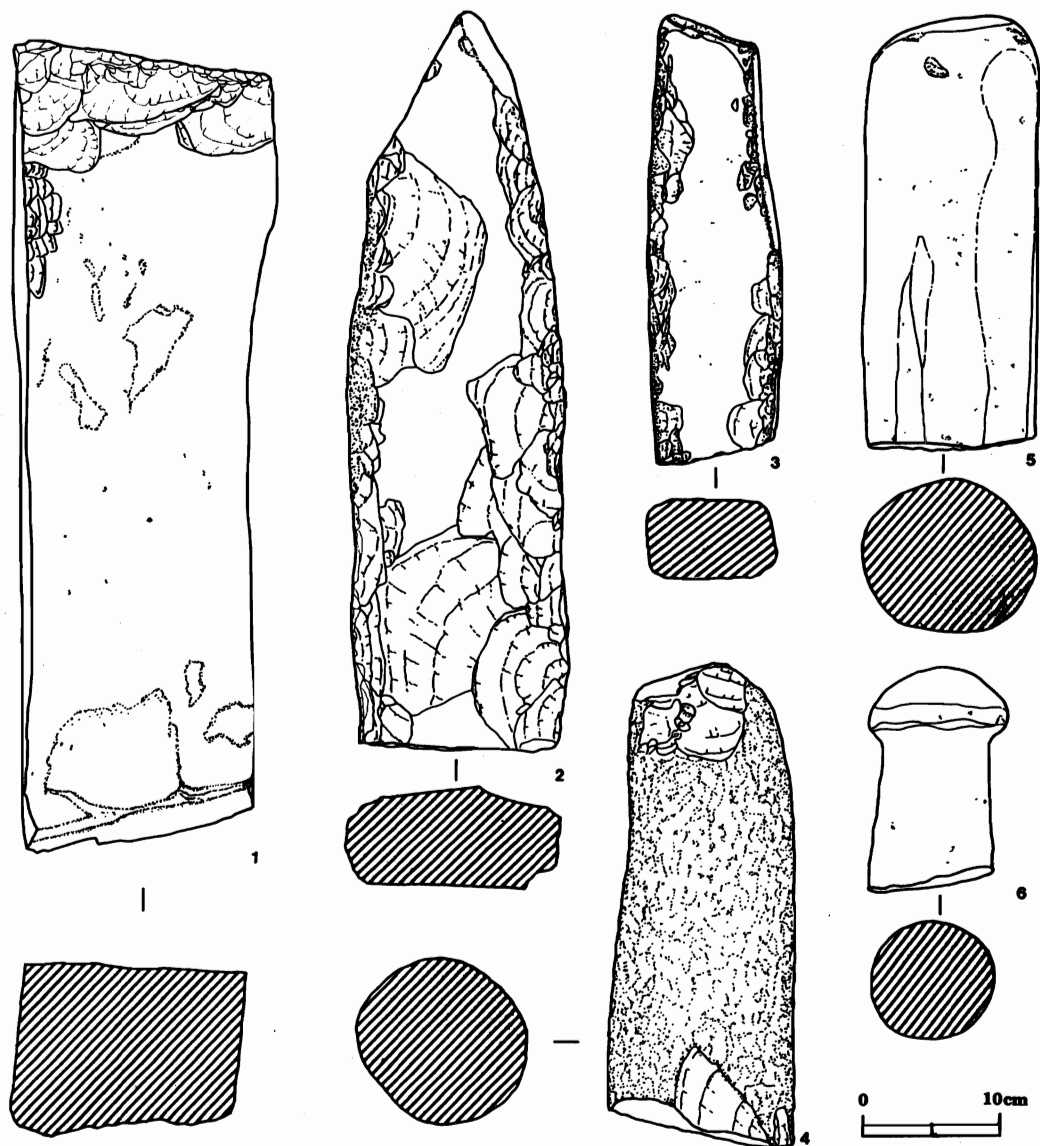
写真3 列石遺構

他には、配石遺構群・列石遺構群・带状小礫群等のように複雑な在り方を示す遺構群もある。ただ、これらは相互に複合したものが多く、プライマリーな状態で

の検出は少ない。この中で、配石下に土壇ないし土壇墓を伴うものも確認されており、埋甕・伏甕類も含めてそれらの相関関係を追及していく必要性がある。

写真4 小礫・配石遺構群





第3図 石棒実測図

(遺物)

縄文時代(中期前葉~後期前葉)の範疇に含まれる遺物としては、人面把手付土器2点、獣面把手付土器4点、土偶(右足)1点、朱漆塗異形土器2点、土錘数点、土製円板10数点等の土製品も含めて土器類だけで大形コンテナ箱約150箱分あり、石器類としては石槍・石鏃・磨製石斧・打製石斧・石皿・石錘・石匙・石棒・石剣・敲石・磨石・円石・十字形石器・異形石器・剥片石器・礫器等各種あり、黒耀石・丹沢系緑色凝灰岩・箱根系安山岩のコア・フレイク類を含めると大形コンテナ箱にして約100箱分

ほどになる。このうち、黒耀石による石鏃、安山岩類による石棒・石皿・打製石斧・石匙類の製作を実施していることが確認されたことは注意しておくべきであろう。なかでも、石棒の製作工程を示す良好な資料(第3図)については群馬県松井田町恩賀遺跡の類例とも比較しつつその分布も含めて今後精査していきたい。

10. まとめ

紙面の都合で調査内容について意を尽くすことはできなかったが、発掘調査を終了したばかりということもあり細部のまとめが不可能ということで御寛容願いたい。

## 4. 平塚市原口遺跡

長谷川 厚・長岡 文紀

1. 所在地 平塚市上吉沢字吉浜1,570番地ほか
2. 調査主体 神奈川県立埋蔵文化財センター(財)かながわ考古学財団
3. 調査担当者 長岡文紀・長谷川厚・阪本宏児・田村祐司・畠中俊明・加藤久美
4. 調査目的 農業総合研究所建設に伴う調査
5. 調査期間 平成4年4月1日～平成6年9月30日
6. 調査面積 57,157m<sup>2</sup>
7. 遺跡の立地

原口遺跡は東海道線平塚駅の西北西約7kmの大磯丘陵北端に位置し、標高73～75mの洪積台地上に立地する。台地は比高約10mの小支谷によって開析されており、台地上の平坦面から谷底の沖積層にかけて遺構・遺物が多数分布している。遺跡北側の台地下約40mには金目川が流れており、対岸には北金目台地と標高1,251mの大山を一望することができる。小支谷を挟んだ南西側に隣接する台地上には向原遺跡があり、企業庁平塚配水池の建設工事に伴う調査が埋蔵文化財センターによって実施されている。(『向原遺跡』・『向原遺跡Ⅱ』、神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告1・25)。

### 8. 調査の経緯

本調査は、既存の県農業総合研究所と園芸試験場および蚕業センター技術研究部の統合整備によって新設される農業総合研究所(仮称)の建設に伴うものである。調査の対象となったのは本館、温室A～D、構内道路、外周道路の各エリアで、平成4年度に本館と温室C・Dエリア、平成5～6年度に温室A・Bエリアの調査が終了し、現在、本年9月30日の終了を目途に外周道路の調査を継続している。(神奈川県立埋蔵文化財センター年報12・13)

### 9. 調査の概要

本遺跡は旧石器時代～近世に及ぶ複合遺跡で、



図1 遺跡位置図

その内容は多岐にわたる。旧石器時代では小支谷斜面裾部のB1とB2相当と考えられる層位から約15,000点に及ぶ石器や焼礫が出土している。石器よりも石核・剥片の割合が多く、石器製作址であったと思われる。県西部で本格的な旧石器時代遺跡が発見されたのは初めてで、注目される成果である。縄文時代は草創期から晩期の各時期の遺物が出土しているが、中心となるのは中期初頭から後期にかけての集落で、現在までに竪穴住居址40軒、敷石住居址8軒、土坑約350基などが発見されている。集落は五領ヶ台期・勝坂期・加曽利E～加曽利B期の各時期でそれぞれ異なる立地を示している。奈良時代は集落が形成されており、竪穴住居址26軒、掘立柱建物柱址16棟等が発見されている。近世は建物地業面2面、井戸9基、段切状遺構28箇所、溝状遺構120条、道状遺構42条、墓塚30基、土坑702基が発見されており、居住と生産の場を総体的に捉えることが可能である。

今回の発表では、こうした数多くの成果のうちで、県内最大規模の97基の方形周溝墓と同時期の76軒の竪穴住居址から構成された集落が発見された弥生時代後期後半から古墳時代初頭までの状況について述べていくことにする。

まず、弥生時代から古墳時代の調査区内での地形をみると、南側に谷が形成され、北西に向かい緩斜面をもちながら谷のみ、北側にかけて平坦な台地部が形成され、それぞれの遺構が検出されている。

谷部では弥生時代後期の包含層および有機物を多量に含む泥炭層が検出され、包含層からは該期の土器片、泥炭層からは木質の保存状態が良好であったため、自然流木とともに鋏未製品、樺欏木製品などの木製品が出土した。

谷部から台地にかけては部分的に傾斜の緩い面があり、そこからは竪穴住居が発見された。これらの住居群は後述する台地上の竪穴住居群より、やや時期が新しいものが多いようである。

方形周溝墓群はこの谷をめぐる斜面部と台地縁辺から平坦部にかけて検出された。谷斜面で発見された9×8.3mの規模の1号方形周溝墓からは、主体部が検出され銅釧2、ガラス玉3、石製白玉10(破片多数)が出土した。この1号方形周溝墓を境に台地縁辺から平坦部にかけて、多数の方形周溝墓が発見された。方形周溝墓のあり方は、谷筋がのびる台地縁辺の北西側に位置するものは谷の形を示す等高線に沿ってU字形の分布し、平坦部では等高線とほぼ平行な配列を示している。谷部と台地縁辺では約15m、縁辺から平坦部では約40cmの比高差がある。それぞれの方形周溝墓は溝が全周するタイプのものがほとんどを占め、10~15mの規模で、正方形に近い形態のものもとても多い。最大規模は22.5×16mのもので、20m代のは3基認められた。形態の傾向として規模が大きくなるにつれて、平面形が長方形になることがうかがえる。

谷部を取り囲んで分布する方形周溝墓は例外となるが、台地平坦部で検出された隣接する方形周溝墓間では、溝を重複しながら連続して整然と形成されていることがわかる。こうした点から方形周溝墓群は、地形による制約を受けながらも、時期的に連続して形成されたことがうかがえる。ただし、部分的に方形周溝墓の主軸方位が台地平坦部の北側寄りの方角周溝墓同士で若干のズレがあることや、周溝の深浅や平面形態で隔切れのものが存在することから、単一土

器型式の時期ではなく、比較的長期にわたって台地上で墓域の形成が行われたものと考えられる。

台地上全体の分布を考えると、台地平坦部の金目川によって開析された小さな谷が入り組む北側の縁辺は道路部分の範囲の調査したにすぎないが、古墳時代後期の円形周溝墓が10基検出されただけで、方形周溝墓の分布はやや薄くなることが推測される。また、道路調査部分の南東側で方形周溝墓が7基検出されていることから、後述する2つの集落群に挟まれるような状態で、台地上平坦部の東側から北西側にかけて方形周溝墓群が分布しているのではないかと推測される。

こうした方形周溝墓群とともに竪穴住居址群が、2群に分かれて存在することが確認できた。1つは南側の谷部に面する台地平坦部にあり、方形周溝墓群から約20~30mの空白地帯を挟んで、台地平坦部で19軒の竪穴住居址が発見された。確認された住居址の範囲は約100×50mの広がりをもつ。もう1つは台地北側の金目川に開析された舌状の形をした台地縁辺部で発見された。この竪穴住居址群は西側と南東側を断面V字形の溝で画された範囲に、きわめて密集した状態で44軒が発見された。溝間の距離は直線距離で約100mで、ほぼ先の竪穴住居址群の分布範囲と同規模である。これら2つの住居址群は台地平坦部の中央を南北に貫く道路部分の調査で方形周溝墓群が発見されたことから、方形周溝墓群を挟んで存在することが考えられる。なお、この断面V字形の溝に画された住居址群の内、3軒から銅釧が出土している。こうした同一台地上で2つの竪穴住居址群が存在することと、墓域の形成の状況は決して無関係でないことから、今後の検討すべき大きな課題となる。

## 10. ま と め

以上のように、紙数の関係で弥生時代中期の遺構・遺物についてもふれることができず、書き尽くせない部分があるが、本遺跡での弥生時代後期~古墳時代初頭の調査成果は神奈川県弥生時代から古墳時代への社会の変化を考える上で重要な提起をすることになるであろう。今後、周辺の同時期の調査成果を十分に咀嚼しながら、検討を加えていくことにしたい。



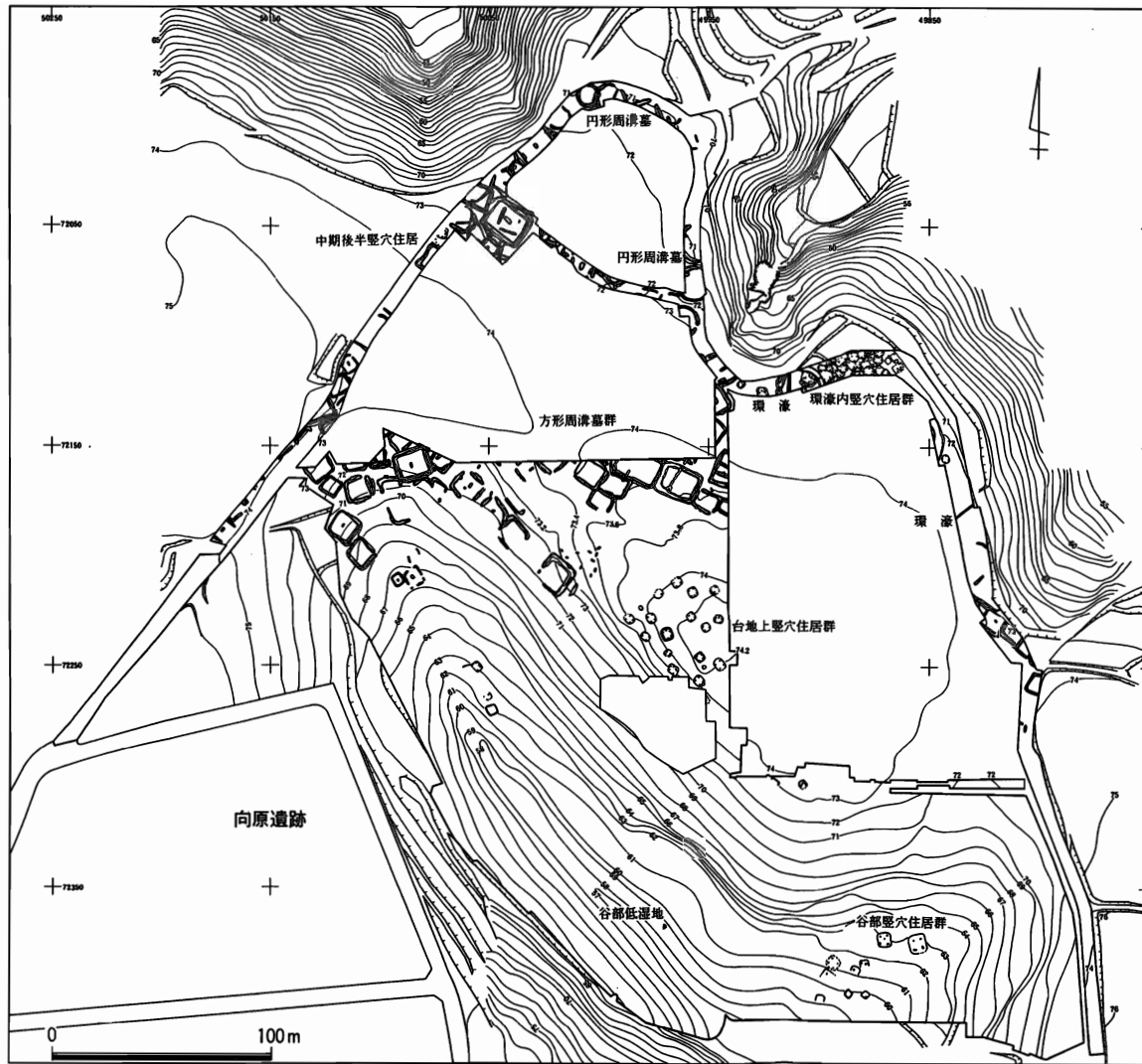


圖2 弥生時代~古墳時代遺構分布圖

## 5. 横須賀市大塚古墳群（吉井・池田地区遺跡群内）

玉口時雄・大坪宣雄・北爪一行

1. 所在地 横須賀市池田町2丁目32番地  
- 2・他
2. 調査主体 横須賀市吉井・池田地区埋蔵  
文化財発掘調査団（団長 玉  
口時雄）
3. 調査担当者 大坪宣雄
4. 調査目的 土地区画整理に伴う事前調査
5. 調査期間 平成4年11月30日～平成6年  
1月24日
6. 調査面積 5,000㎡
7. 遺跡の立地

吉井・池田地区遺跡群は、三浦半島の東岸、久里浜湾から平作川を2.5km程遡った左岸の丘陵内に位置している。丘陵内では古墳群を含む7箇所、8遺跡が調査されている。大塚古墳群は丘陵南端の台地上に位置する。台地は東西に深く切れ込んだ谷戸によって北側に広がる丘陵から切り離されており、南・北の2方向は急斜面によって区画され、東・西側は比較的緩やかな斜面となっている。頂上部には東西200m、南北120m程の範囲で標高60～78mの南傾した斜面地が広がっており、古墳群は斜面地のやや南寄りに立地している。丘陵上には古墳群と重複して大塚台遺跡があり、縄文時代早期の集落跡と第2次世界大戦時の砲台跡が検出されている。

周辺の遺跡としては、平作川右岸の低地に古墳の検出された「八幡神社遺跡群」、「蓼原古墳」、さらに南側の丘陵内には「台ノ坂古墳」、「かろうと山古墳」、「こんびら山古墳」等の古墳があるほか、南側1.3kmの「茅山貝塚」、南東側1kmの「吉井貝塚を中心とした遺跡」等が古墳群の立地する台地上から遠望できる。

### 8. 検出された遺構・遺物

大塚古墳群は昭和27年に主墳と目される大塚古墳の主体部が調査され、あわせて2基の円墳の存在が報告されているが、これらは調査はされておらず遺物の散布状況から古墳であろうと判断されていた（『神奈川県文化財調査報告』第19集 1953 赤星直忠）。今回の調査では、

これらが前方後円墳と円墳であることが確認された（大塚4・5号墳）ほか、さらに3基の古墳（前方後円墳1、円墳2）が発見され、大塚古墳群が前方後円墳3基（大塚古墳・大塚2・4号墳）、円墳3基（大塚3・5・6号墳）からなることが明かとなった。古墳の名称は大塚古墳（大塚1号墳）以下を発見または確認順に大塚2～6号墳とした。いずれの古墳も耕作による削平、軍事施設による地形改変の影響を被り墳丘や周溝の一部が破壊されていた。新たに発見された2・3・6号墳はいずれも墳丘を削平されており地上からは確認できず周溝のみが検出されている。各古墳の規模は以下の通りである。

〔大塚古墳（大塚1号墳）〕全長31m、後円部径16m、前方部の最大幅17m、くびれ部の幅16m、墳丘高3m（南側）、周溝の幅1.5～4m。前方部と後円部の比高差はほとんど無い。

〔大塚2号墳〕全長（21m－現存）、後円部径13m、くびれ部の幅7m、周溝あり。断層による破壊が著しい。

〔大塚3号墳〕径15m、周溝あり。西側にブリッジ部をもつ。

〔大塚4号墳〕全長19m、後円部径14m、前方部最大幅（9m）、くびれ部の幅7m、墳丘高2.8m（東側）、周溝あり。断層による破壊と傾斜が著しい。

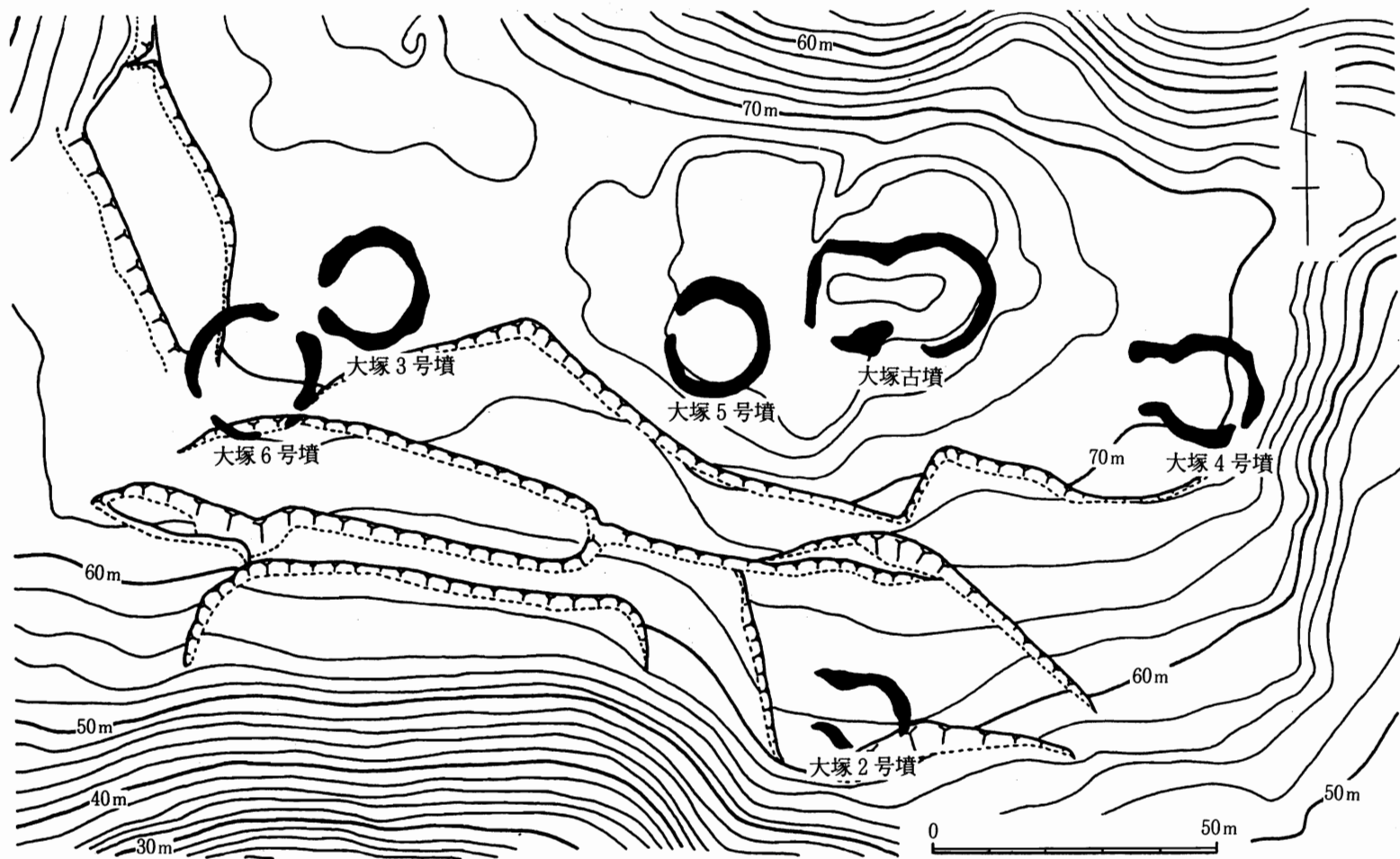
〔大塚5号墳〕径15m、墳丘高2.4m（南側）、周溝あり。西側にブリッジ部をもつ。

〔大塚6号墳〕径19.3m、周溝あり。北側にブリッジ部をもつ。

3基の前方後円墳はすべて西側に前方部をもつ。

墳丘の遺存している大塚古墳・4・5号墳では80cmほどの厚さの盛土が確認された。墳丘の構築にあたっては大塚古墳・5号墳では台地の凸部を整形し古墳の形に削り出した後、盛土により形を整えており、4号墳ではほぼ平坦面に盛土をして構築している。

主体部は、昭和27年に調査された大塚古墳の



第1图 大塚古墳群全体图

ほかに4号墳から2箇所検出されている。4号墳第1主体部は墳丘上にあるが後世の削平により遺存状況は不良である。規模は(130cm-現存)×80cm、深さ30cm、長軸はほぼ東西を向いている。遺体、棺材は遺存していなかった。遺物は直刀2、刀子1、鉄鏃6以上がほぼ長軸に沿って出土している。第2主体部は墳丘盛土下から検出されている。土壙の規模は390cm×180cm、深さ70cmを測り、底面には棺床を固定したと思われる200cm×55cmの凹部が観察された。遺物は土壙内から刀子1、埋め戻された土壙上から直刀1、刀子1、ガラス製小玉・白玉56、土玉74が出土している。

3号墳では周溝覆土内に硬化面が検出されており、南側ではこの面上から土師坏6、須恵器坏2、短頸壺1、小型赤彩壺1がまとめて出土している。坏及び短頸壺は破壊されており、小型赤彩壺はこれらの破片の中に正位に据えられてほぼ完形で出土している。また、この付近のやや上位から須恵器短頸壺1が完形で出土している。(第2図)

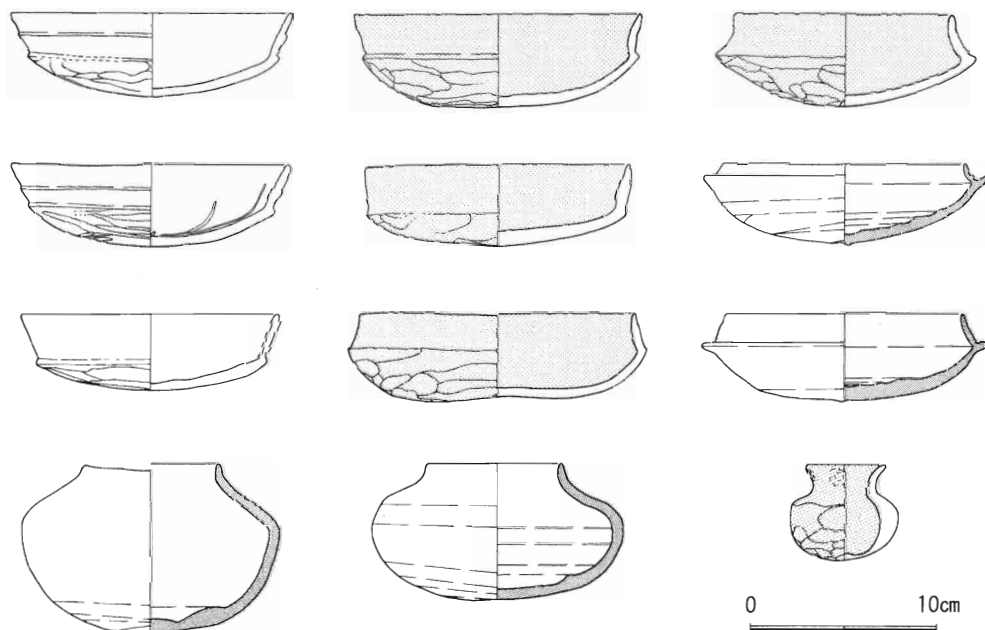
遺物は上記のものほかに、大塚古墳主体部付近の攪乱層から鉄鏃4、2号墳周溝から横瓶片、3号墳周溝内から鉄鏃2、4号墳周溝内か

ら須恵器横瓶(破壊された状態)、墳丘盛土下から須恵器甕片、5号墳周溝内から須恵器提瓶1、土師器坏1、6号墳周溝内から土師器坏1などが出土している。

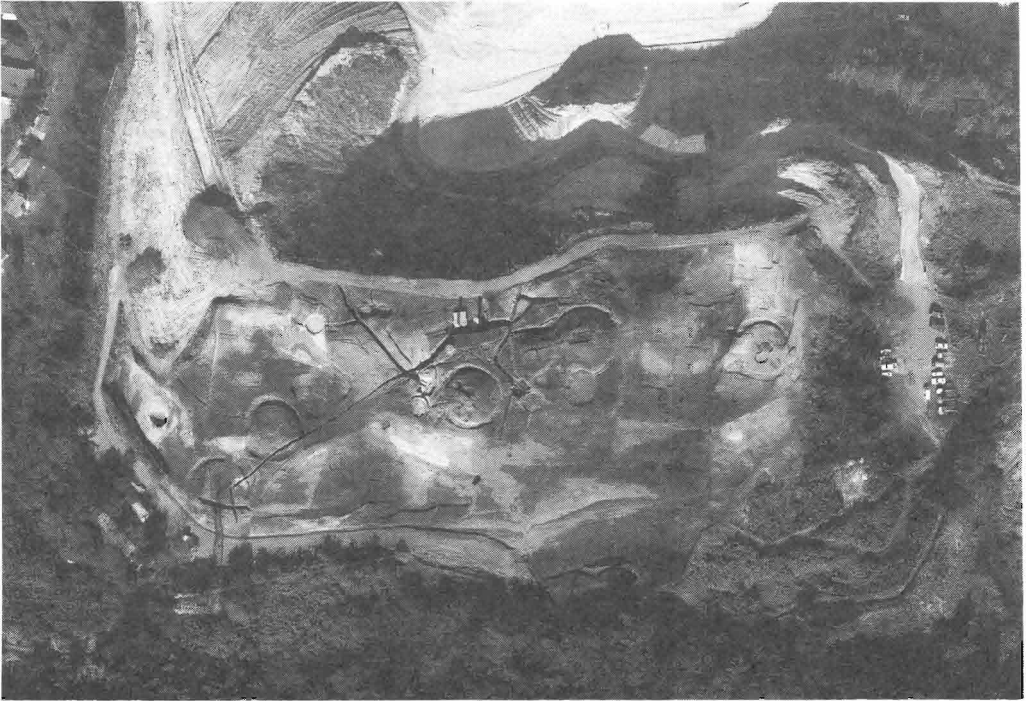
遺物の時期はいずれも古墳時代後期に属すると思われるが、主体部からの土器の出土はみられず、古墳の築造時期を推定する資料には乏しいといえる。

## 9. ま と め

久里浜湾周辺地域の5世紀代から6世紀代にかけての古墳の様相は、東京湾を望む丘陵上の長沢1号墳から久里浜湾に面する平作川右岸の砂堆上の八幡神社SD01古墳、八幡神社前1号墳、蓼原古墳へと立地の推移をみるができる。その後古墳の立地は再び丘陵上に移っており、大塚古墳群もそうした時期に形成されたものと思われる。人為と自然災害による破壊により6基中3基は周溝のみの検出であり不明な点が多いが、6号墳を除きみな西側に前方部やブリッジ部をもち古墳を構築した主体の一貫性を窺わせる。また、本古墳群東側の斜面上の集落No428遺跡では7世紀代と思われる土器の出土がみられ本古墳群と関連のあるものか今後の課題となろう。



第2図 大塚3号墳硬化面出土遺物



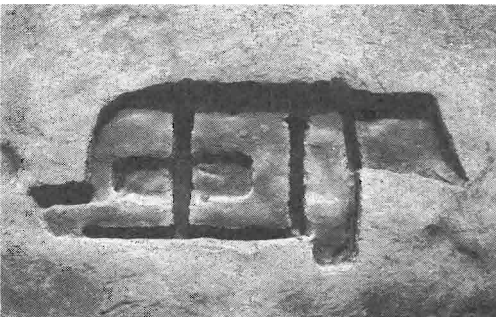
大塚古墳群全景



大塚古墳（北から）



大塚4号墳



大塚古墳主体図



大塚4号墳第2主体部

## 6. 横浜市大場横穴墓群F・G・H横穴墓群の調査

大川 清・吉田好孝・渡辺 務

1. 所在地 横浜市緑区大場町962他
2. 調査主体 大場第二地区遺跡群発掘調査団(団長 大川 清)
3. 調査担当者 吉田好孝・渡辺 務
4. 調査目的 区画整理事業に伴う事前調査
5. 調査期間 平成5年10月4日～平成6年3月4日
6. 調査面積 900m<sup>2</sup>
7. 遺跡の立地

本横穴墓群は、東急田園都市線江田駅の西方約1kmに位置する。この付近は多摩丘陵南端の下末吉台地と接する部分にあたり、丘陵と小支谷が複雑に繰り返される平坦面の少ない丘陵地形である。鶴見川支流の早淵川上流域に位置し、狭い谷戸の最奥部の斜面上に立地する。また今回調査を行なった横穴墓周辺は谷戸の谷頭が集まる部分に位置し、各谷戸にはそれぞれ横穴墓群が存在する。

遺跡のすぐ西側約300mには、小黒谷横穴墓群、同じ谷戸のすぐ南150mには市カ尾横穴墓群が、西方800mには前期から後期にかけての古墳と横穴墓等が調査された、稲荷前古墳群、南方約1kmには縄文～平安時代にかけての大集落で、眉庇付冑や短甲・金銅製の馬具等が出土した朝光寺原遺跡が存在している。また南東約1kmには、古代武蔵国都筑郡の郡衙と考えられている長者原遺跡がある。

### 8. 調査の経緯

今回調査を行なったG・H群は平成3年2月～同4年9月にかけて調査を行なった、大場第二地区遺跡群B地点の南端部に位置する、ほとんどが未開口で、雑木林に覆われ、事前に横穴墓の存在は確認出来なかったが、北半部に5群25基の横穴墓が、すぐ東にも5基の横穴墓を確認したため、地形から考え横穴墓の存在する可能性が考えられたため、事業者と協議したところ、斜面下には民家があるため、防災上の点から考え、工事が進行し安全を確保出来てから調査を行なうこととして、一旦調査を終了し、新



図1 遺跡位置図 (1:50000)

- 1 赤田横穴墓群
- 2 長者原遺跡
- 3 市カ尾横穴墓群
- 4 稲荷前古墳群

たに今回調査を行なったものである。今回の調査により本遺跡群では、合計で古墳5基、横穴墓は8群42基となった。また横穴墓群は全て小規模な谷戸を利用して構築しており、地形から群ごとに分け、アルファベットで表している。

なお、一昨年調査を行なったF群も、G群との関連から、あわせて発表するものである。

### 9. 調査の概要

#### <遺構>

横穴は全て泥岩層に掘こんでいた、以下各群ごとに横穴墓の概要を記す

#### F横穴墓群

横穴墓5基、時期不明の横穴式の墓1基を確認した。小丘陵の先端部に位置し、江戸時代頃に横穴墓群のほぼ中央に道路が造られた際に、一部が破壊されていたが、その他はほぼ良好に遺存していた、また玄室の一部が破壊されてい

た3号を除き未開口であった。

横穴墓の平面形は1・2号が隅丸の方形、3号が楕円形、4号が方形、5号が逆台形で、天井は1・2・3号がドーム形で、床面も羨門までほとんど変化しないが、4・5号は玄門部と羨門部には段差のあり、天井はアーチであった。敷石は2号を除いて認められた。

玄室内に施設のあるものは5号のみで、玄室の奥部に溝を掘り、泥岩の切石を置いて、低い棺床を造っていた。

墓道は破壊されているものや、自然地形により遺存しないものが多かったが、遺存しているものはほぼ方形であった。

なお本横穴墓群では、この他に時期不明の横穴式の墓1基が確認された、斜面に掘られているが、形態は地下式土坑墓のようで幅90、高さ80cmで、横に250cmほど掘り込んで、底面は入口に比べ20cmほど低くなっており、入口部には径10cm程の丸太を縦に並べて立て掛け、その外側を土砂で埋めていた。また内部には85×44cmの棺状の木箱が収められていた。

#### G横穴墓群

横穴墓4基、時期不明の溝1条を確認した。小丘陵先端の急な斜面上に位置し、3号の天井が崩れ一部開口した痕跡が認められたが、他はいずれも未開口であった。

玄室の平面形は1・4号が逆台形・2号が楕円形・3号が撥形とバラエティーに富んでおり、規模も差が大きい、1号は大型で、奥部には棺座が認められた、またこの横穴墓にのみに敷石が認められ、他の3基には認められなかった。天井は1・4号がアーチ、2・3号が断面台形であった。

閉塞は不整形の泥岩塊を1～2段積んでいるものが多く、その上部は土で埋めていた。

墓道は台形ないしは長方形で、4号は幅約1、長さ約7m（底面での規模）と細長かった。また墓道埋積土の観察から追葬の痕跡の認められるものや、焼土・炭化物層の認められるものもあった。

溝は出土遺物もなく時期は不明であるが、斜面に直行して長さ約18mを確認した。断面形はほぼ逆台形で、深さは30～40cmであった。

#### H横穴墓群

8基の横穴墓を確認した。また江戸時代の小規模な地崩れにより、墓道埋積土の上部に土砂が厚く堆積していたが、いずれも遺存状況は良好で、開口していたものは無かった。

横穴墓は小規模な谷を利用して、その中央部を中心に、ほぼ等間隔に構築していた。このうち東端の1基は、すぐ西側に構築途中で放棄した2号が存在するため、単独であったが、他の6基は全て墓道が重複し、このため3～8号の墓道全体がひとつの墓道の様であった。そのため各横穴墓の墓道の形態は不明な点が多い。

玄室の平面形は方形ないし逆台形で、天井は全てアーチ形であった。また玄室内に施設のあるものはなかった。敷石は5号と構築途中の2号を除いて敷かれていた。なお玄門の床面には泥岩の切石を框としたものが多かった。排水溝は全ての横穴に認められた。また4・6号の2基の玄室内には貝床（ともにヤマトシジミ）が認められた。

閉塞は不整形の泥岩塊を積み上げていたが、河原石が若干認められるものもあった。また閉塞中に間層が認められたものも多く、追葬の痕跡と考えられる。また1号の墓道には泥岩塊と、河原石が認められ、追葬時に除去した閉塞の一部と考えられる。3～8号の墓道埋積土の下半部には横穴を掘削した際の排土と考えられる泥岩層が厚く堆積し、一部には切り合いも認められ、これらの堆積状況から、ある程度の新旧を知ることが出来た。また埋積土中には6号の玄室内に敷いていたと考えられる河原石が多量に認められ、これらは追葬時の片付け等の際に墓道に廃棄されたものと考えられる。また5号の羨門の前方には、焼土や炭化物の層が認められ、墓前祭等を行なった痕跡であろう。

#### <遺物>

##### F横穴墓群

主体部内からは直刀、小刀、刀装具、小札、刀子、鉄鏃、有茎の鎌、銅製の耳環、勾玉、丸玉、ガラス小玉、土師器の坏が出土。墓道からは鉄鏃、土師器の甕片、須恵器の提瓶片が出土した。また時期不明の墓の棺状の箱の内部から漆製品の断片と歯牙、表土から寛永通宝1枚が



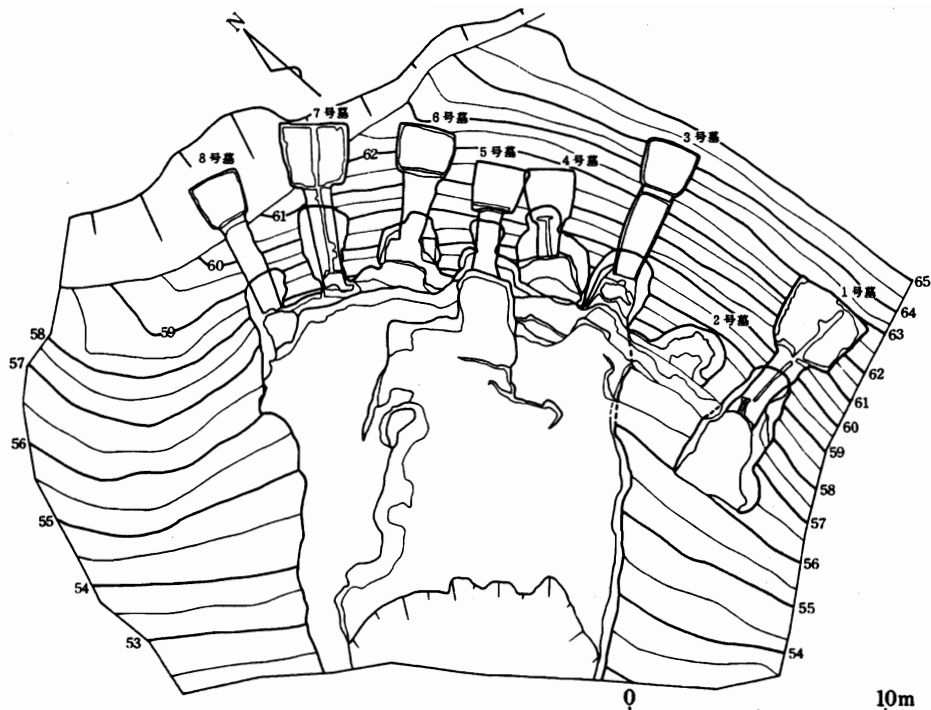


図2 大場H横穴墓群全体図(1:300)

出土した。

#### G横穴墓群

1号の羨道から土師器の甕片、墓道埋積土中から須恵器の甕片が出土したのみで、その他は出土していない。また4号の玄室底面から木質が発見されたが、未開口のため古墳時代のものと考えられるが、用途等は現時点では不明である。その他は3号の主体部の埋積土上部から、近代の陶磁器片が多量の礫と共に出土した。

#### H横穴墓群

主体部内から直刀、小刀、刀装具、鉄鏃、刀子、銅・鉄製の耳環、棗玉、管玉、土師器・坏、須恵器・提瓶が出土し、全ての横穴墓から遺物が出土した。墓道からは鉄鏃、土師器・坏片・甕片、須恵器・平瓶等の土器が出土した、土器は墓前祭等に用いられたものと考えられ、全て人為的に割られており、平瓶の1点には底部に文字と考えられる線刻が認められた。また墓道から遺物の出土したのは3・6号のみであったが、墓道は各横穴墓の構築時に整地が行なわれており、このために残らなかった可能性がある。また4・6・8号の玄室からは人骨・歯牙が確

認された。

#### 10. まとめ

本横穴墓群で注目されるのは、H群の墓道の底面に横穴墓の掘削時の排土が確認できたことと、墓道の整地の痕跡が確認できたことであり、これらの堆積状況・切り合いにより、ある程度新旧関係を把握する事が可能であり、これに形態等から考え、5・4→1・7→3・8→6、という2つの造営主体による、4期程度の変遷が考えられる。最も古いのは5号であるが、後出し、重複する4号から6世紀末頃と考えられる、環状の把手を持つ大型の提瓶が出土しており、ほぼ6世紀末ごろから横穴墓の掘削が行なわれたものであろう。

G群については遺物がほとんどなく、形態もバラエティーに富んでいるため、変遷等の詳細は今後の課題であるが、この群は隣接するF群との関連で考えねばならないであろう。F群は1・2・3号の天井がドーム形態で、4号は玄室が方形で、玄門の天井部に段があり、時期的な変遷がうかがえるが、いずれも古い様相を呈している。



また今回の調査で出土した遺物の中で注目されるものとして、F群-1号の玄室から桂甲の小札、F群-4号羨道の有茎の鎌、H群-3号墓道の平瓶の底部の文字の線刻がある。横穴から小札の出土した例としては大田区の塚越横穴が有名であるが、付近では類例も少なく注目される。有茎の鎌は大型で、古墳時代の一般的な鎌に比べ大型で、用途が異なる可能性がある。また全国的にも類例が少なく、また羨道の閉塞の上部から出土したことから、葬送儀礼にかかわるものである可能性がある。平瓶の底部の文字は「甲」と読める文字を除いて、その他は明らかではないが、古墳時代の文字資料は少なく注目される。

本遺跡群周辺は、小丘陵と小支谷が深く入り込んだ、平坦面のほとんどない地形で、これらの地形を利用し、尾根上には古墳を構築し、その斜面には小規模な谷を利用して、8群42基の横穴墓を構築していた。ただし地形から見ると、4群に大別でき、それぞれ別の谷戸に面して構築されている。このうち今回調査を行なった、G群は前回調査のF群とともに、市カ尾横穴墓群と同一の谷の最奥部に位置する。この2群で計9基で、市カ尾A・B横穴墓群と合計すると28基となる。なおF群の東側にはわずかながら旧地形の残る部分があり、この部分にも横穴墓の存在する可能性がある。H群はG・F群と同一の斜面上に位置するが、別の谷の奥部に位置する。この他は北側に開く谷の東側斜面に立地する、A・B・D・E群の計20基と、西側斜面に立地するC群の谷戸の5基であるが、C群の周辺には地形から考えて、付近の他場所に横穴墓の存在する可能性がある。

この付近は横穴墓の多い地域として知られているが、周辺の横穴墓を加えると、僅かの数百メートルの範囲に100基を優に越える数の横穴墓が構築されており、この集中が何を意味するのか、しかも付近には、これらの横穴墓の数に匹敵するほどの集落跡は認められず、また地形から考え大集落のあった可能性も低く、集落と墓地の関係を考える上で重要な資料となろう。

古墳と横穴墓はいずれも後期の所産であり、これらが近接して、ほぼ同時期に築かれており、

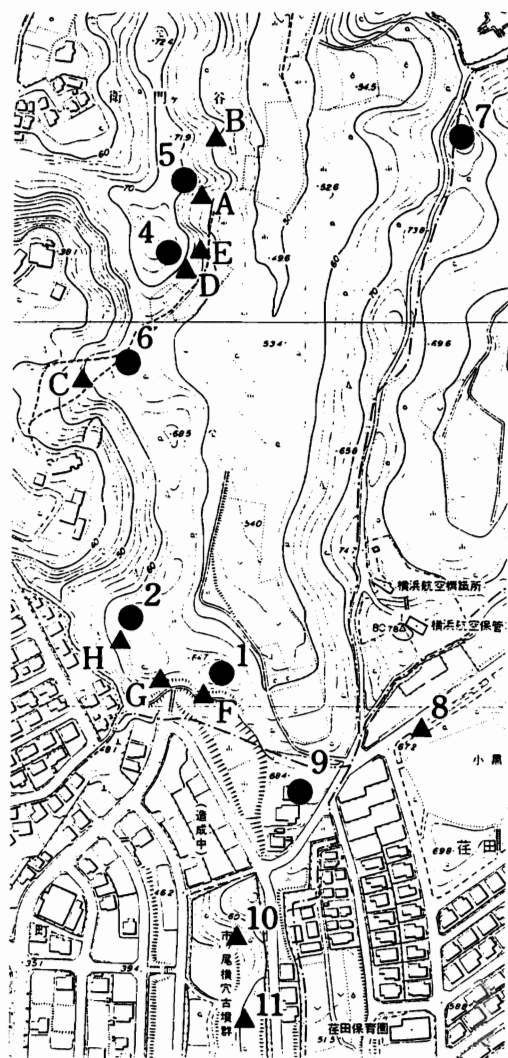


図3 周辺の古墳・横穴墓分布図 (1:5000)

- 1~6 大場1~6号墳 7 赤田4号墳
- 8 小黒谷横穴墓群 9 車塚
- 10 市カ尾A横穴墓群 11 市カ尾B横穴墓群
- A~H 大場A~H横穴墓群

両者の墓制の違いは、被葬者の階層や関係を考えるには貴重な資料である、しかも近接する赤田1~3号墳や稲荷前13号墳のような、横穴式石室をもった古墳は確認されておらず、また遺物も主体部内からは全く出土しておらず、この主体部の違いや、遺物の質・量等の違いは興味深いものがある。(吉田)

## 南関東テフラから見た天変地異期

都留文科大学教授 上杉 陽

### はじめに

ある時代のそれぞれの地域社会を支える生産様式・生活様式には、それがどのようなものであれ、その時代・その地域に特有な自然環境上の限界がある。その限界内で、高度成長、人口増大、生活圏拡大などがなされるのであるから、やがては、その生産様式・生活様式に固有の資源の枯渇・環境変化が生ずる。

そうした環境劣化に天変地異が追い打ちをかけることがある。天変地異、即ち、急激な気候・海水準変動、激しい火山活動・地殻変動の同時多発が、“泣きっ面に蜂”となるか、一転して、“神風”となるかは、大いに、その時代、その地域社会の実力にかかっている。

以下、地球規模の天変地異期の例を2つ紹介する。第1は急激な寒冷化期であり、第2は急激な温暖化期である。これらに対して、南関東地域社会が如何に対応したか、ご教示戴ければ幸いである。

### I：南関東でのテフラ目盛の精度

富士火山東麓地域では、古富士火山期のテフラ層は、古いほうからY-1～Y-141テフラ層[10→1.1万年前]が登録され、新富士火山期のテフラ層はS-0-1～S-25[10,500年前→現在]が登録されている。ここでは、10～10<sup>3</sup>年単位の自然史復元が可能である(上杉、1993参照)。

大島火山地域では、古期大島層群のテフラ層が、これまでに、古いほうから、Osb127～Osb1テフラ層[2.5万年前→1700年前]までが登録され、新时期大島層群のテフラ層は、S $\delta$ ～S $\alpha$ [AD250→AD750]、N4～N1[AD750→AD1200]、Y6～Y1[AD1200→現在]が登録されている。ここでは、10<sup>2</sup>年単位の自然史復元が可能である(上杉ほか、1994参照)。

神奈川県を含む南関東一帯でも、これに、他の伊豆諸島の火山(主として新島・神津島・利島)、伊豆箱根地方の火山(天城山・箱根山など)、信州・北関東の火山(木曾御岳・八ヶ岳・浅間山・榛名山・赤城山・男体山)の遠来テフラ、西南日本起源の広域テフラなどを併せ用いれば、原理的には10<sup>2</sup>単位の自然史復元が可能である。但し、現場での地層面復元技術の開発が不十分で、現状では、その復元に高度の熟練を必要とする。それだけに、室内における様々な物理学的・化学的鑑定手段の併用は不可欠である。

### II：S-9～S-13期(概略3400～2800年前)

#### の天変地異-急激な寒冷化の例-

S-9テフラ層中には新しいもので加曽利B1式までの土器が含まれる(山本ほか、1981など)。S-13番テフラ層最上部中には、縄文晩期末大洞A式土器が含まれる(近藤、1993)。即ち、この時期は、数千年にわたって続いた縄文時代の終焉期である。

S-9期には南関東各地で下方浸食型斜交関係が形成されており、S-9～11層は冷涼湿潤気候のもとで形成された土壌層の中に泥にまみれて堆積する。重くて気孔の少ないごろごろしたスコリア礫や特徴的な熱水変質岩片が多く、天城山カワゴ平軽石起源などの遠来・広域白色～透明ガラス片を含む。

日本各地で一斉に海面が下がり寒冷湿潤化する(中井ほか、1987;安田、1990)。砂丘地帯は泥炭で覆われ始める(上杉・遠藤、1973)。また、大地震が生じ、大規模火山活動が多発した(表1参照)。そのため、縄文海進で形成された入江～溺れ谷、潟湖～湖沼は急激に干上がり、時には下刻され、降下堆積するテフラや上流から押し寄せた土砂で一挙に埋め立てられる(鈴木ほか、1993)。

日本だけではなく、全世界で、地殻変動・火山活動が激しく、気候も一挙に寒冷化し、海面も急降下する(中尾、1989など)。南半球オーストラリア南部では、この時期は細かい湿潤期を挟む変動の激しい最乾燥期であった(大森ほか、1987)。

なお、この時期の前半(BP3400~3200)には、太陽黒点数はほとんどゼロであり、後半は小極大期となる(Eddy, 1981)。また、隕石衝突も指摘されている(酒井・松本盆地団研、1991)。

北半球では、それ以前の小温暖化期にある程度の力を蓄えた北方民族が、ダメージを受けた南方先進地域を占領したり、気候難民としてそこに流入する例が多い。一部先進地域(インダス川中下流部灌漑農耕地帯)は放棄されている(安田、1990;成瀬、1976)。

この時期の変動は、あまりにも激しく、対応する時間が充分には与えられなかったと思われるが、日本の各地域社会はどのように立ち向かったのであろうか?

### Ⅲ：Y-137~Y-141期(概略14000~11000年

#### 前)の天変地異-急激な温暖化の例-

相模野でハードローム(L1H)と呼ばれるものの大半は、Y-137-1~3層[BP14000?~13500?:最古ドリラス期(寒)]に相当する。Y-137-2表層土壌層中に槍先形尖頭器が含まれる(宮ヶ瀬遺跡、砂田佳弘氏鑑定)。B0と呼ばれるものの多くは、Y-137-4[BP13000?]上半土壌層である。ここからは季節的な石組み焔が出土する(砂田、1994a)。Y-138・139・140[BP13000?~12500?:最古ドリラス期末期]は多くの地点ではソフトローム(L1S)となり、Y-141-1~2[BP12500?~12000?:ペーリング期(温)]が漸移層、Y-141-3[BP12000~10500:古ドリラス期(寒)・アレレード期(温暖)・新ドリラス期(温)]がスコップで切ると、“てかてか”と光る黒色腐植質となっている例が多い。湿地近くではY-139あたりまでが黒色腐植質となる。これらを、古富士黒土帯と称する。吉岡遺跡、慶応義塾湘南藤沢キャンパスでは、この層準に縄文草創期の前半?の土器が含まれるように思われる。な

お、伊豆大島ではY-137相当層準(O63)から、本格的に黒色腐植質化している。

東京湾において-40mまで、海面が急降下した後、1.05万年前の大地震・大噴火(溶岩流出が目立つ)と共に幕を明けた縄文海進期に相当する新富士火山期前半[S-0-1~S-0-6~S-4]の黒土層を新富士黒土帯と称する(上杉ほか、1993)。

こちらは、全体に、“ふかふか”しており、冷涼な高地では、しばしば、きなこに薄墨をかけた感じとなる。2つの黒土帯は、“フジクロ”と総称されるが、地質学的には、大規模な不整合をはさむ別層準なので、考古学的にも区分する価値があると思われる。如何であろうか?

表2に見られる如く、Y-137-1土から始まる細石器時代は、地震活動とそれに続く大規模火山活動で幕を明ける晩氷期の急速海進期(七号地海進期)に相当する。海面は-数10mから、一挙に-10~-20mあたりまで上昇し、平均気温も現在ほどではないにしても、氷期の極盛相に比べ、恐らくは、10℃前後は急激に温暖化していた。

北アフリカ・イベリア高原やアナトリア高原・オリエント一帯では、氷期には、雨量が多く、草原や森林があり、多数の大型・中型哺乳動物が棲息していた。人々は豊富な動物群を食用資源とすることに成功した。しかし、人口の増大・生活圏拡大による加速度的乱獲は、温暖化・乾燥化による草原・森林の喪失、大型・中型哺乳動物の減少に拍車をかけた。まさに、“泣きっ面に蜂”である。人々は、山麓部での小麦栽培と遊牧に生活を懸け、やがては乾燥気候下の大河沿岸(チグリス・ユーフラテス川など)に追い込まれ、そこでの灌漑農耕に活路を見出すこととなる。

Y-137-1期に始まる細石器時代は、なにをきっかけに始まり、なぜ縄文時代に移行せざるをえなかったのであろうか?

#### 文 献

新井(1973)オリエント、16(2)。Eddy(1981)Climate and history. Princeton Univ. Press. 遠藤(1985)白山高山帯自然史調査報

告書。遠藤ほか(1983)アーバンクボタ、21。平川・小野(1981)地形学事典。二宮書店 近藤(1993)市原市文化財センター研究紀要Ⅱ。町田・新井(1992)火山灰アトラス。東大出版会。村田・衣笠(1989)ギリシヤ。河出書房新社。中井ほか(1987)日本第四紀学会講演予旨集、17。中尾(1989)地学雑誌、98(5)。中村ほか(1992)日本第四紀学会講演要旨集、22。成瀬(1976)地学雑誌、85(3)。大森ほか(1987)地学雑誌、96(1)。酒井・松本盆地地研(1991)地学団体研究会第45回総会シンポジウム講演要旨集。砂田佳弘(1994a)国学院大学考古学資料館紀要、10。砂田佳弘(1994b)神奈川考古、30。鈴木・山本(1978)気候と文明。朝倉

書店。鈴木ほか(1993)第四紀研究、32(4)。寺田ほか(1994)第四紀研究、33(3)。上本ほか(1994)神奈川考古、30。上杉・遠藤(1973)第四紀研究、12(3)。上杉(1989)古代中近東の土器—変遷とその背景—。中近東文化センター。上杉(1989)関東の四紀、15。上杉(1990)関東の四紀、16。上杉(1992)月刊地球、5。上杉(1993)第四紀研究、32(5)。上杉ほか(1993)関東の四紀、18。上杉ほか(1994)第四紀研究、33(3)。山本ほか(1981)都留文科大学昭和55年度卒業論文。安田(1990)気候と文明の盛衰。朝倉書店。

(94年9月25日)

〈MEMO〉

表1 縄文時代終焉期の天変地異 - 急激な寒冷化の例 -

推定年代	富士火山～伊豆諸島火山～日本の他火山	日本の断層活動	世界の火山・地殻変動	気候変動	社会変動
BP2800±	富士山S-14	大島O11		南極温暖化(中尾, 1989)	メディアヤベルジャン人ザグロス山脈越える ケルト人ブリテン島進出
BP2800±			駒高火山形野沢岩屑流		
BP2850±	上郷土壌層BP2880晩期大塚A式	→S-13[砂沢sco]	←箱根地割れ発生		
BP2900±	↑S-12[大塚sco]	O12 鴨ヶ島尾白池	駒高火山大谷火山灰層0V-b~a	白山Hm-4(濃藤, 1985)	北伊豆で地震 中部地方阿寺断層地震
BP2950±	S-12-2[大沢sco]				
BP3000±	S-12-1	O13	琵琶湖西岸大地震		スキタイ人南ウクライナから南進, ザグロスに達する ケルト人南ドイツから南進イベリア半島に広がる。
BP3000±	BP3000±新湯焼山KG-f			BP3030±龜ヶ岡遺跡で泥炭堆積開始	
BP3050±	神山一帯土石流		BP3050±90石垣島珊瑚礁隆起		
BP3050±	↑天城山カワゴ平火山跡←	S-11[湯船第1sco2]	←天城山～箱根山で断層:地割れ発生←←←←←←←←←←		
BP3100±	箱根山山神山山崩れ	→芦ノ湖形成→大湊谷火砕流→	S-10[湯船第1sco1]	→O14	天城山カワゴ平軽石(KGP) ↑
BP3100±			新湯焼山火山KG-e→前川土石流→	焼山火砕流→真川溶岩(早津, 1985)	
BP3150±	O15上郷土壌層中に加替利B				
BP3200±	↑O13		イタリア, Vesuvius火山大噴火Z-1	気温急激低下(-3°C: 安田, 1990)	BP3174東部イラン・エラム人, メソポタミア征服 BP3200±, インダス中下流灌漑農地水不足で壊滅 BP3250±地中海世界に後期ギリシャ人侵入, ミケーネ文明崩壊→BP2700まで暗黒時代
BP3250±	BP3240±箱前山Tta-d	BP3240±千勝岳Tc-c2			BP3300±高知県東部・東南部で多量の稲属花粉 BP3370± ミノア文明本拠地の1つテラ島壊滅 BP3400: クレタ島で諸宮殿破壊, ミノア文明衰退
BP3250±	BP3260±; S-9上半土壌層中に加替利B				
BP3300±	S-9↑		北伊豆で地震(丹那断層発掘調査グループ, 1983)	BP3290±石狩砂丘で泥炭堆積開始	BP3300± 地中海サントリニーニ火山大噴火→
BP3350±	O16				↑ BP3400±クレタ島で地震と津波→ 東京湾で急激な海退, 寒冷化 南極でも寒冷化開始
BP3400±			BP3400±: ニュージーランド, タウポ火山大噴火(Waimihia火山跡)		
BP3400±					
BP3500±	S-8	九重火山噴火 阿蘇火山噴火	東北千屋断層地震		BP3500±2700: オーストラリアで最乾燥期

表2 晩氷期(BP14000~10500)の天変地異 - 急激な温暖化の例 -

BP10500±	BP10490±0: 新富士火山三島溶岩大流出→BP10340: S-0-1	BP10400±: 千和田火山	神津島?	気候状態など	
BP10500±	BP10500±: 浅間火山MK-16	BP10500±: Osb55-3	須走で地割れ, 箱根で燧発角礫? 転石? 北伊豆断層系平山断層で地震断層形成	BP10300~9100	プレボレアル期(海面東京湾で~40m)
BP11000±	大島火山O56	霧島火山大噴火: 礫層降下軽石(小林, 1989)	霧島火山第1	ニュージーランドKarapiti Tap	ドイツLaacher See
BP11500±	O57	BP11240±: 浅間火山MK-15(中村ほか, 1992; 早田, 1993)±			
BP11750±	BP11710~11210±? 古富士火山Y-141-3腐植帯	BP11770±: 浅間火山MK-14(同上)			
BP12000±	BP12000±?~11700±? Y-141-2-1~3	BP12000±: O58	→新島宮塚山?		
BP12500±	BP12600±? Y-140	→BP12400±? Y-141-1	BP12400±: O59	→大規模溶岩流	BP12500±: 男体山大噴火(今市スコリアなど)
BP12750±	BP12800±? Y-139	BP12700±: O60	→大規模溶岩流	BP12650±: 千和田火山八戸降下軽石→八戸軽石流(寺田ほか, 1994)	
BP13000±	BP13150±: 浅間火山MK-13: 草津黄色軽石Ypk→第2軽石流	BP13000±: O61	BP13000±: 桜島火山形成閉		
BP13000±	BP13150±? Y-138	→箱根山北東麓で転石, 阿東麓で地割れ	BP13010~12380: 釈田駒ヶ岳カルデラ形成		
BP13250±	BP13300±? Y-137-4	→最上部にはは漂白された土壌(B0)			
BP13500±	BP13500±? Y-137-1	BP13450±? Y-137-2	BP13400±? Y-137-3	→梨が原溶岩?	BP13400±: O62
BP13750±	BP13800±: Osb64	地割れ発生	→BP13700±: O63	→大規模溶岩	
BP14000±	BP13900±: 古富士火山大淵溶岩[OSSW1: 坂本・中村, 1993]				
					BP14000± スペインアルタミラの壁画

相模野B1埋没土壌

※ Y-137-1~141-2の年代は確実ではない。テフラ中の遠来テフラ・広域テフラ(主としてガラス)を用いて対比を進める必要がある。

※ 引用文献は記載しきれていない。一部の年代は町田・新井(1992)火山灰アトラス, 東大出版会による。

## 7. 川崎市下麻生古墳群

北原 實徳

1. 所在地 川崎市麻生区字花島1,094番地
2. 調査主体 下麻生古墳群発掘調査団
3. 調査担当者 北原實徳
4. 調査目的 住宅地造成工事に伴う事前調査
5. 調査期間 平成4年8月5日～12月5日
6. 調査面積 約1,500m<sup>2</sup>
7. 遺跡の立地

遺跡は、小田急線「柿生」駅の南東方約1.3kmに位置し、遺跡の南方約0.7kmには鶴見川(谷本川)が北西から南東方向に流れ、川沿いに主要地方道横浜上麻生線が通っている。

下麻生古墳群の所在する一帯は、柿生泥岩層を基盤とし、麻生川や真福寺川及びその支流によって複雑に開析された瘦尾根と狭小な谷が不定方向に入り組んでいる。この泥岩層の上部には、堆積物がほとんどなく、尾根の大部分は文字通りの馬の背状を呈している。真福寺川と早野川に挟まれた丘陵地の南端に、標高40～55mの支丘が西から東に延びており、この東端部の尾根上に古墳は築かれている。古墳の頂部からは、鶴見川の沖積地を一望することができる。

### 8. 調査の経緯

今調査は、民間の宅地造成事業に伴うものである。当事業計画地内には、川崎市の周知遺跡早野-9番遺跡(高塚古墳)が記載され、「下麻生古墳群」と呼称されていた。遺跡台帳の地形図には、丘陵の尾根上に3基の円墳が記入されており、事前踏査においても3基の存在が予測された。

これらの3基は、東から西へ1、2、3号墳として調査を進めたが、中央の2号は途中で自然地形であることが判明した。このため、東側の1号はそのまま1号墳とし、西側の3号を2号墳とした。

### 9. 調査の概要

#### 1号墳

**墳丘** 西から東に向かって延びる丘陵の先端付



- |           |             |
|-----------|-------------|
| 1. 下麻生古墳群 | 7. 亀井古墳群    |
| 2. 花島横穴墓  | 8. 牛塚古墳(湮滅) |
| 3. 白山横穴墓  | 9. 狐塚古墳     |
| 4. 麻生井横穴墓 | 10. 子ノ神社古墳  |
| 5. 仲村横穴墓  | 11. 早野横穴墓   |
| 6. 亀井横穴墓  |             |

第1図 遺跡の位置及び古墳分布図

近の頂部を削平して整形し、中心部に盛土をして墳形を整えた、いわゆる山寄せ式によって築造されていた。西側には周濠を設けて尾根を遮断し、墳丘を独立させていた。

墳丘の平面形は、東西約18m、南北約13mの楕円形を呈し、高さは約2.8mを測る。北西部は、後世の表層崩壊(小規模な地滑り)によって、地山・盛土の相当量が流失しており、もう少し円形に近い形状であったと推察される。盛土は、墳頂部を中心として径9m内外の範囲に認められ、頂部での厚さは1m程であった。

封土は、地山の上に泥岩の小ブロックを含む黒褐色土や暗褐色土などで順次積み重ねられていた。石室の裏込め部は特に堅く突き固められ、版築状をなしていた。

**周濠** 周濠は西側にのみ検出された。幅1.3～2.7m、長さ約8.5m、深さ0.5m前後で、丘陵の尾根を分断するように弧状に掘り込まれていた。底面は平坦で、壁は内彎ぎみに立ち上がり外傾

していた。

**石室** 泥岩の切り石を使った、両袖型の横穴式石室で、南西方に向かって開口していた。全長は約4.5mを測り、主軸方向はN-34°-Wを示す。泥岩は、長さ50~80cm、幅40~60cm、厚さ18~40cm大の切り石を主体に横積みされ、随所に切り組み手法が用いられていた。

天井石及び側壁の上部は石室内に崩落しており、大半は泥土化していた。崩落した泥岩は、床面の川原石や大刀などに密着していたことから、構築後比較的早い時期に崩落したものと考えられる。なお、玄室の北東部は盗掘を受けており、根石の一部を残す程度であった。

玄室は、長さ244cm、幅220cmで、奥壁は4段目の下端部まで、側壁は両側とも5段目まで遺存していた。各壁の中央部は、3段目あたりまではほぼ垂直に積み上げられていた。側壁は4段目から、内側へ少しずつせり出させてある。床面には、径5~20cm大の川原石が敷き詰められていた。

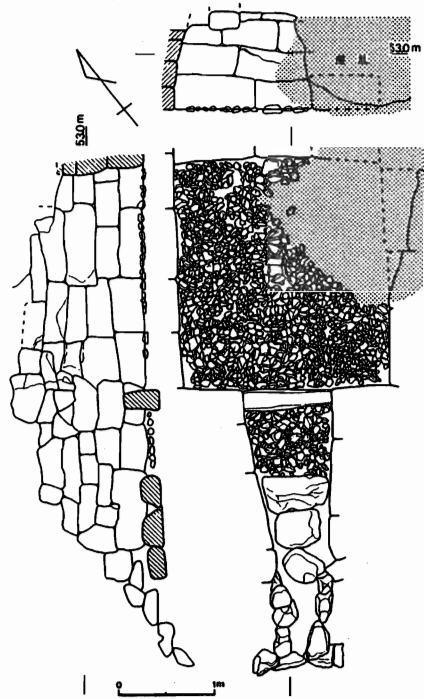
玄門は、床面に長さ97cm、幅12~21cm、高さ33~42cmの框石が置かれていただけで、門柱石は立てられてはいなかった。

羨道の長さは、東壁で176cm、西壁では208cm、幅は玄門部で97cm、羨門部では72cmであった。根石には玄室のものとはほぼ同じ大きさの切り石が用いられていたが、2段目以上は厚さ15~25cm程の比較的薄手の石が積まれていた。

羨門部は、小さめの切り石が階段状に積み上げられ、一部は小口積みにされていた。

掘り方は、根石の据え方に合わせるように掘り込まれ、玄室と羨道の床面が各据え方の底面より3~12cm掘り下げられていた。底面は奥壁側から羨門側に向かって30cm程低く傾斜し、玄室と羨道のほぼ中央に幅5~15cm、深さ2~5cmの溝が掘られていた。この溝は排水溝と思われるが、框石で一旦跡切れ、10cm程東西にずれており、実質的な排水機能を果たせる構造ではなかった。

羨道部の閉塞は、上半分は不明であるが、下半部の石には移動した形跡はみられなかった。径15~30cm大の泥岩塊が外側約1mの範囲まで乱雑に積み上げられ、板材等の使用はみられな



第2図 1号墳石室

かった。

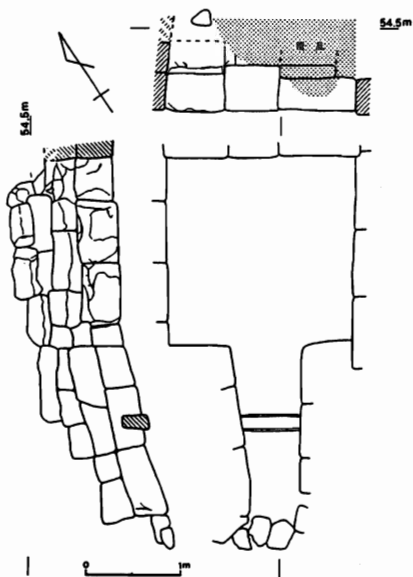
**出土遺物** 玄室内からは大刀・鉄鏃、盗掘坑から耳環、入口部の手前から土師器坏などが出土した。大刀・鉄鏃は、石室崩落時の衝撃によって細かく破碎され、さらに錆による腐食が著しく遺存状態は非常に悪い。大刀は、玄室西壁際の敷石上に切先を玄室側に向け、2振りりが並行して置かれ、柄部付近には鏝が散在していた。鉄鏃は、奥壁付近を中心に50本分程(約150片)が出土した。鏃身の形状が判るものは、鑿箭式24本・片刃箭式6本の30本である。

耳環は、玄室北東コーナーの盗掘坑底面から1点出土した。盗掘時に落としたものと思われる、全体に緑青が吹いている。

土師器坏は、入口部手前の底面付近から出土した。底部は偏平な丸底状をなし、体部との境に段を持つ。体部は外反ぎみに立ち上がり、口縁部の外側下位に稜を有す。

#### 2号墳

**墳丘** 1号墳同様、いわゆる山寄せ式によって築造されていた。墳丘の平面形は、裾部が不明瞭なため判然としないが、東西10m前後、南北



第3図 2号墳石室

7～8mの楕円形を呈し、高さは1.5～2.0m程の規模と考えられる。北側は表層崩壊の影響を受けていた。

**周湮** 周湮は確認されなかった。

**石室** 泥岩の切り石による両袖型の横穴式石室で、南西方に向かって開口していた。全長は約4.1mで、主軸方向はN-40°-Wを示す。泥岩は長さ50～80cm、幅40～60cm、厚さ20～45cm大の切り石を主体に横積みされ、随所に切り組み手法が用いられていた。

天井石及び側壁の上部は石室内に崩落しており、大半は泥土化していた。玄室の北東部は盗掘を受けており、根石を残す程度であった。

玄室は長さ195cm、幅200cmで、奥壁は2段目の一部、東側壁は5段目、西側壁は4段目まで遺存していた。西側壁は、2段目から内側へせり出していたが、それより上の石は崩壊が著しく、旧状を留めるものはなかった。また、東側壁も壁面側は途中で折れて石室内に崩落していた。床面は、地山の砂質黄褐色土を平坦に整えただけで、川原石や泥岩等が敷き詰められた痕跡は認められなかった。

玄門は床面で幅約75cmを測り、門柱石はなかった。この部分のみ、天井石と考えられる石が遺存していたが、樹木の侵蝕等による風化がかなり進行しており、石の輪郭が確認できる程度で

あった。床面から天井までの高さは約90cmで、天井部の幅は40cmであった。羨道は、長さ約190cm、幅は羨門付近で約50cmを測る。中央よりわずかに玄室側へ寄った位置に、長さ64cm、幅17cm、高さ19cmの框石が置かれていた。框石の中央下部には幅10cm、高さ12cmのアーチ状の穴があげられていた。床面は、玄門部で玄室より7～8cm段状に下がり、さらに羨門に向かって低く傾斜し、羨門部は玄門部より約55cm下がっていた。側壁は2段目まではしっかりした石が横積みされていた。

羨門部は、床面上に40×20×15cm大の扁平な石が2～3枚遺存していたが、これより上の石は風化して泥土状となり、個々の形状は識別できなかった。

掘り方は、根石の据え方に合わせるように掘り込まれ、玄室部と羨道部で5～10cmの段差が認められた。玄室部の底面は羨道部側へ15cm程低く傾斜していた。羨道部の底面は羨門部に向かって60cm程低く傾斜し、両側壁部とは2～10cmの段差がみられた。羨道の閉塞については、遺存状態が悪く判然としなかった。玄室の中央部床面付近から鉄片が1点出土しているが、細片であるためその種類等については不明である。この他には何も出土しなかった。

## 11. ま と め

当初3基と目されていた古墳は、調査の結果2基であることが確認された。2基の古墳は、墳丘の築造方法・石室の形態及び構築方法など、極めて共通点が多い。一方、框石の位置・玄室の縦横比等、部分的に若干の相違が認められる。これらの違いは時間差によるものと考えられるが、2号墳は出土遺物に恵まれず、1号墳との関係を明確にすることはできなかった。1号墳は、入口付近から出土した土師器坏形土器の特徴及び出土状態などから、7世紀前半代の築造と考えられる。

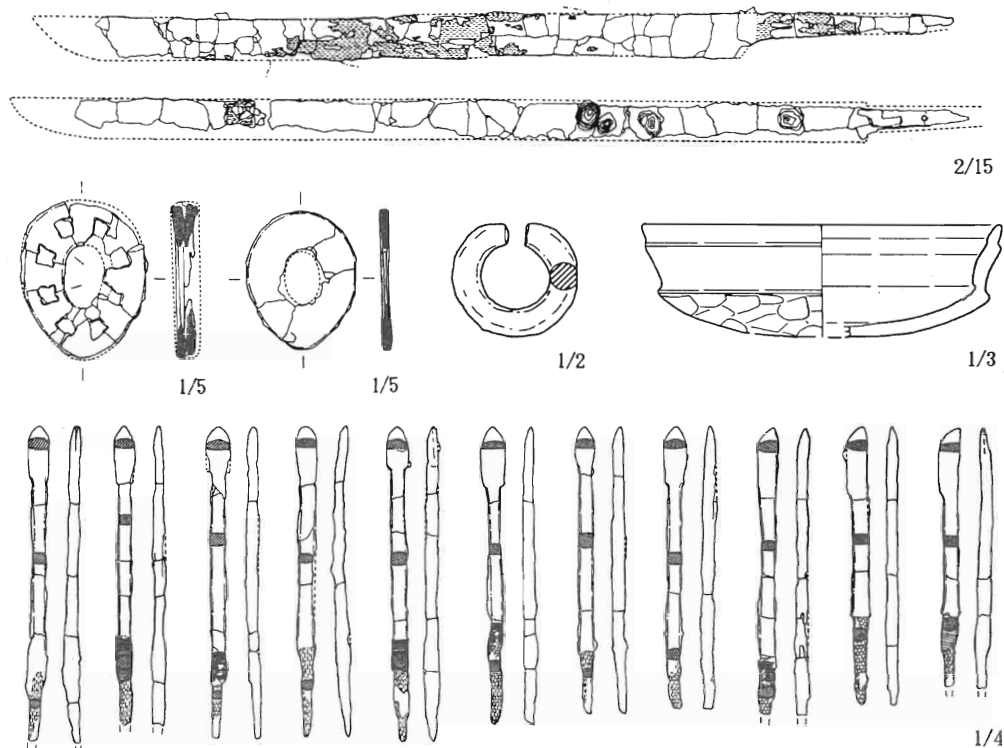
下麻生古墳群の周辺には遺跡位置図(第1図)に示したように、高塚古墳や横穴墓が高い密度で分布している。隣接する横浜市緑区の稲荷前古墳群や赤田古墳群では、泥岩の切り石を使った横穴式石室を持つ後期古墳と、その同一丘陵の斜面に構築された横穴墓とがセット関係をな



すような在り方を呈している。下麻生古墳群の立地する丘陵では、赤田2号墳と赤田横穴墓群のような直接的な在り方は認められなかったものの、北西100m程の至近距離に花鳥横穴墓が在る。この横穴墓の詳細については不明であるが、稲荷前や赤田での在り方に近いものと考え

られる。なお、内容は詳ではないが、緑区寺家町内にも同様の古墳と横穴墓の存在が知られている。

下麻生古墳群の所在する丘陵の南側裾部一帯には、古墳時代の土器類の出土が知られており、該期の集落が存在するものと推測される。



第4図 1号墳出土遺物



第5図  
1・2号墳全景

## 8. 海老名市国分尼寺北方遺跡（第7・8次調査）

伊東秀吉・大坪宣雄・荻上由美子（第7次調査）・小林克利（第8次調査）

1. 所在地 海老名市国分北3032番地の1  
他（第7次調査区・国分第1地区）、海老名市国分1丁目3062番地の1（第8次調査区・国分第2地区）
2. 調査主体 海老名市国分尼寺北方遺跡  
（第7・8次）調査団  
（団長 伊東秀吉）
3. 調査担当者 大坪宣雄
4. 調査目的 共同住宅建設に伴う事前調査
5. 調査期間 平成5年7月30日～11月15日  
（第7次調査区）  
平成5年11月4日～平成6年2月5日（第8次調査区）
6. 調査面積 1067m<sup>2</sup>（第7次調査区）  
630m<sup>2</sup>（第8次調査区）

### 7. 遺跡の立地

国分尼寺北方遺跡第7次調査区は小田急線海老名駅の北東約1kmに位置する。東側の小田急小田原線、西側のJR相模線との間にあり、海老名市域の北方の北側に広がる台地上平坦面の南側に立地する。遺跡の標高は約34.0mである。

第8次調査区は第7次調査区の北方約200mに位置する。遺跡の北方に隣接して国道246号線が東西に走っている。遺跡の標高は約36.5mである。

周辺には東方約70mに国分尼寺跡、南方約500mに相模国分寺跡がある。

### 8. 調査の概要

海老名市内の国分寺・国分尼寺と同一台地上に立地する関連遺跡に関しては、基本土層が確立しており、本遺跡もこの基本土層を基にして調査を行った。遺構は第7次、第8次調査区ともに第Ⅲ層（黒褐色土）上層～中層で確認されている。第7次調査区では「法華寺」の墨書土器が掘立柱建物址から出土している。検出された遺構・遺物は以下のとおりである。

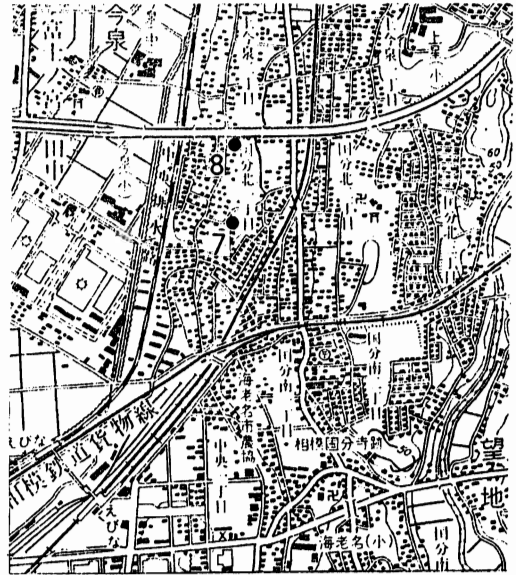


図1 遺跡位置図

### 第7次調査区

#### 〈遺構〉

弥生時代中期

方形周溝墓1基

奈良～平安時代

竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡2棟、竪穴状遺構2基、馬墓壇2基、土坑4基、道路状遺構1基、溝状遺構6条

中世

掘立柱建物跡1棟、竪穴状遺構1基、墓壇1基、土坑5基、ピット群

#### 〈遺物〉

縄文土器（中期）、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦、墨書土器、石製品、土製品、かわらけ、中世陶器、鉄製品、馬歯、古銭

合計

テンバコ6箱

### 第8次調査区

#### 〈遺構〉

弥生時代～古墳時代

竪穴住居跡4軒

奈良～平安時代

竪穴住居跡7軒、掘立柱建物跡2棟、土坑4基、溝状遺構3条

中世

掘立柱建物跡1棟、土坑2基、地下式竈1基

### 〈遺物〉

弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦、鉄製品、石製品、土製品、陶磁器、グリーンタフ

合計 テンバコ15箱

第7次調査区と第8次調査区との出土遺物の量の差は第8次調査区の検出遺構の主体が住居跡であるのに対して、第7次調査区の主体が掘立柱建物跡と溝状遺構であることによるものと思われる。次に両調査区の主な遺構と遺物について概述する。

### 〈第7次調査区〉

第7次調査で確認された掘立柱建物跡は2棟である。北側の建物跡は梁行き2間、桁行き3間の倉庫跡で、10本の柱穴と2本の束柱からなる。柱穴の底面付近には拳大～人頭大の河原石が環状あるいは円形に並べられていた。

南側の建物跡は梁行き3間、桁行き5間で西側に庇を持つ。東西方向にややずれて建て替えがなされ、北側の柱穴埋め土の内からは「法華寺」と書かれた内黒の墨書土器が出土している。又、8世紀末～9世紀初頭の須恵器坏、毛抜きと思われる鉄製品も出土している。

### 〈第8次調査区〉

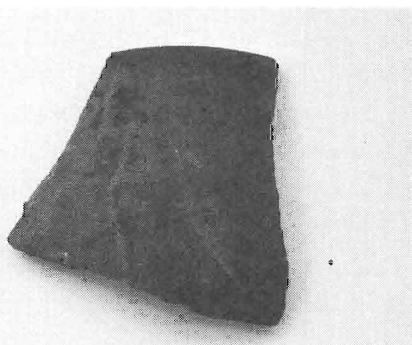
確認された11軒の内、弥生時代に属するものは12号住居跡、古墳時代後期に属するものは、6・9号住居跡である。奈良～平安時代に属す

る住居跡のうちで、竈が検出されたものは3・4・10号住居跡の3軒であり、いずれも東壁中央部に構築されている。8世紀末～10世紀初頭に構築されたものと思われる。掘立柱建物跡は3棟確認されている。この内2号掘立柱建物跡は東側に庇様のピットをもち、全てのピットに焼土粒子、粘土粒子を含んでいる。2間×3間の南北棟である。

### 9. ま と め

第7次調査区で出土した墨書土器は本遺跡と国分尼寺との関連を推測させる。しかし、本遺跡が尼寺自体に付随するものか、あるいは一時尼寺が移転していたとされる漢河寺を指すものなのかは現段階では明確ではない。

第8次調査区は弥生時代～奈良・平安時代の集落跡であるが、調査区南側に検出された東西に走る溝は第7次調査区で検出された溝と走行方位をほぼ等しくし、墨書土器を多数点出土していることから、国分寺及び官衙との関連が考えられ、区画溝としての性格が推測される。



第7次調査区1号掘立柱建物跡出土墨書土器

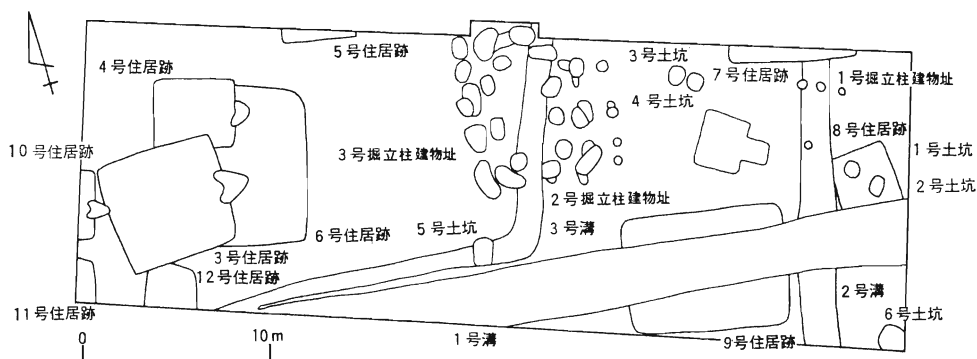


図2 第8次調査区 全体図

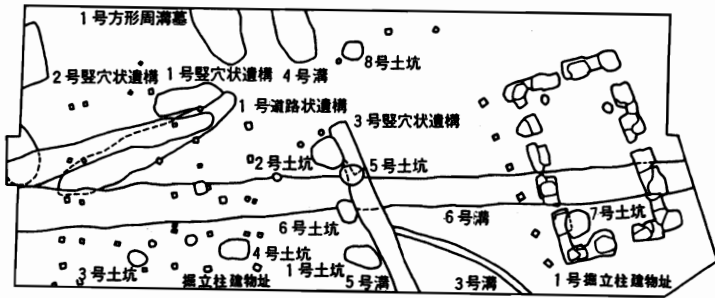
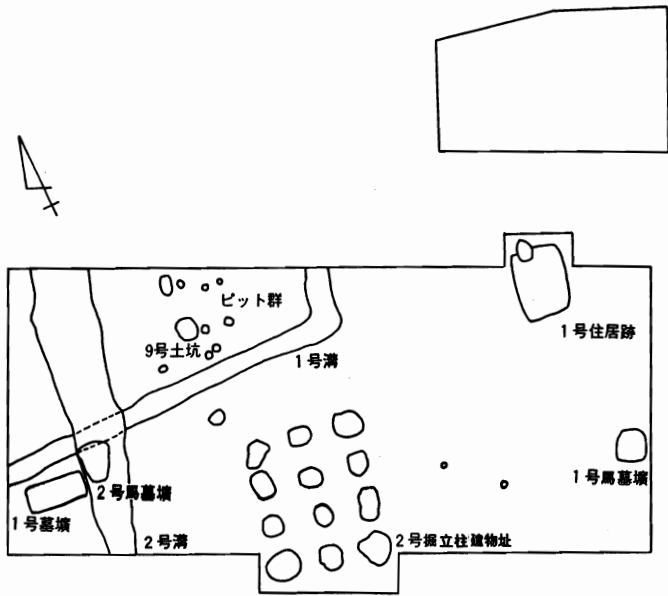
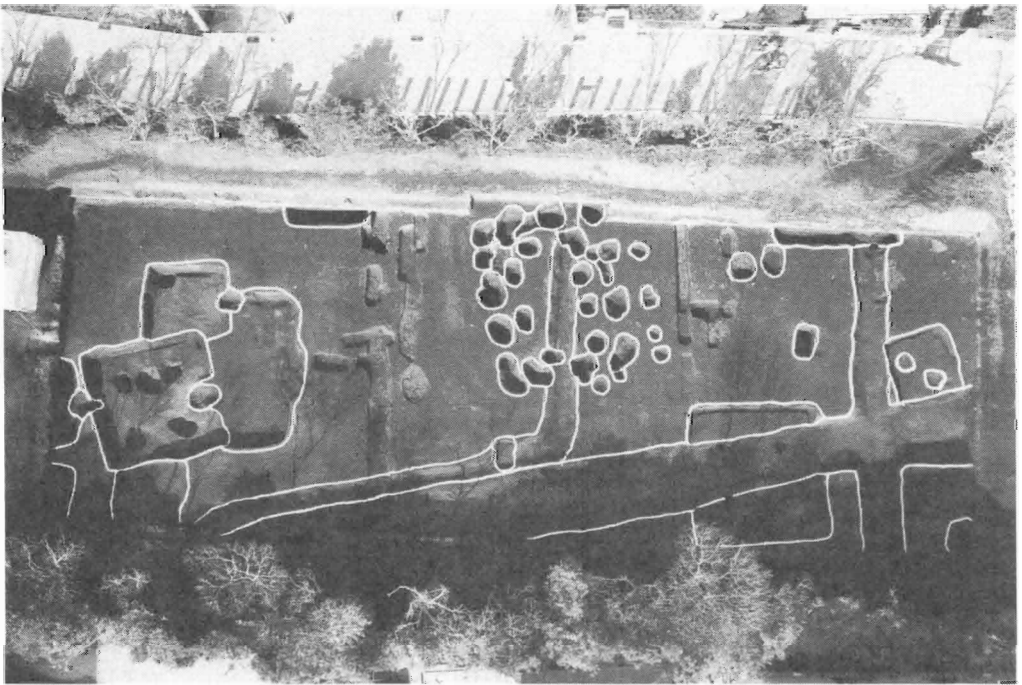


図3 第7次調査区 全体図



第7次調査区 1号掘立柱建物跡 全景（西から）



第8次調査区 全景

## 9. 茅ヶ崎市居村B・前ノ田遺跡

富永富士雄

1. 所在地 茅ヶ崎市本村四丁目  
17番地（居村B遺跡）  
18・20番地（前ノ田遺跡）
2. 調査主体 茅ヶ崎市埋蔵文化財調査会  
（会長 教育長 小出忠啓）
3. 実施機関 居村B・前ノ田遺跡発掘調査  
団（団長 岡本孝之）
4. 調査担当者 富永富士雄・宮下秀之
5. 調査目的 都市計画道路建設に伴う事前  
調査
6. 調査期間 平成4年2月1日～平成5年  
12月10日（期間内断続）
7. 調査面積 約2,400㎡（対象面積）
8. 遺跡の立地

茅ヶ崎市域は、北半部が相模原台地（高座丘陵）の南縁にあたり、南半部が「湘南砂丘」として知られる砂丘（砂州）地形に占められる。砂丘域は、旧海岸線の名残りとみられる小高い砂丘列とそれによって形成された砂丘間窪地（向背湿地）がほぼ東西方向に交互に連なり、大きく7列の砂丘列が知られている。このうち現海岸の砂丘から4番目の砂丘列の頂部には、古くは東海道、現在は国道1号が東西に縦走し、中世後半以来の歴史を残す砂丘であるが、その北斜面部を中心に前ノ田遺跡（200）が立地し、その北裾に形成された浅い谷戸部（低湿地）が居村B遺跡（202）である。さらにその北側の低く細長い砂丘上に、居村A遺跡（199）が立地している。居村B遺跡は、現海岸線から2.3km、西方の相模川から3.8kmの距離に位置している。現地表面での標高は居村B遺跡で約5.5m、前ノ田遺跡で7～15m、居村A遺跡は6m強である。今回の調査地点の現状は、居村B遺跡が宅地及び畑地、前ノ田遺跡が山林（屋敷林）及び宅地であった。また、周辺では南方0.5kmに石神古墳（16）及び石神遺跡（203）、西側に接して南谷原遺跡（206）が存在する。

### 9. 調査の経緯

本調査は、神奈川県都市計画道路東海岸・寒

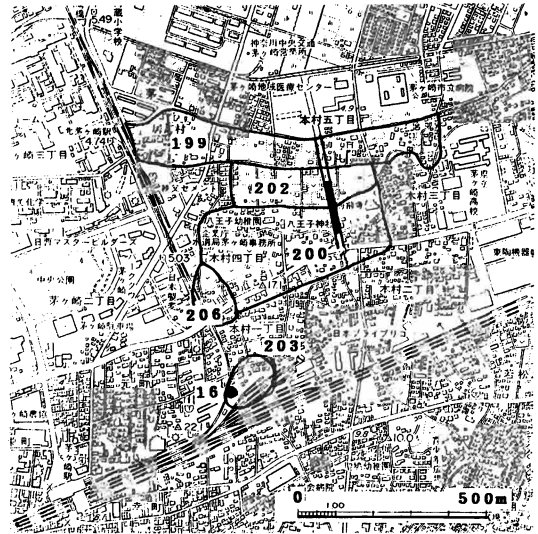


図1 遺跡の位置と調査地点

川線の新築計画に基づき、昭和62年春の工事中発見による居村A遺跡の調査及び同年末から翌63年5月にかけての居村B遺跡の調査に続き、本工事計画においては第3次の調査になるものである。遺跡単位としては居村B遺跡が第2次調査、前ノ田遺跡は下水道工事関連調査を除き初めての調査である。神奈川県藤沢土木工事事務所の依頼により、茅ヶ崎市埋蔵文化財調査会が受託したものであり、平成4年2月から平成5年12月にかけて、工事幅16mの延長170mを調査対象として実施したものである。

### 10. 調査の概要

居村B遺跡は、昭和62、63年の第1次調査の範囲より南へ65mの長さを調査した。このうち前ノ田遺跡に接する約30mの1区では、古代に属する遺構群が全面にわたり検出された。これらの内訳は、掘立柱建物址群と大中小にわたる溝状遺構群及び溝状遺構に区画されるように掘り下げられた低位面、そして土壌状の落ち込みである。掘立柱建物址群は2×3（間）のものが5棟以上南半部に集中し、一部は重複していた他、南側の前ノ田遺跡及び東側の調査区外に続くことがわかった。また、それらの掘立柱建物址群を北側の低位面と境するような位置関係

で、数回にわたる掘り返しがみられる1号溝状遺構（1M）が検出され、さらにそれに平行するように幅2m強、深さ0.6mの2号溝状遺構（2M）が10m北側にも検出された。2号溝状遺構を境に、北側は明らかに一段低い面が広がることが判明し、黒色の湿地性土壌が砂層まで達することが確認された。1号溝状遺構の東端部では削り痕の明瞭な木屑が多量に出土し、製材または木作業が行われていたことを明らかにした。また2号溝状遺構東端では、須恵器破片がまとまって出土した。これら2条の溝状遺構の中央にも掘立柱建物址（6号）が1棟検出されたが、2×2（間）の構造でやや小型であり、全体の調査をとおしても唯一の形態と言えるものであった。

前ノ田遺跡の調査区は、居村B遺跡の南縁とした市道（未舗装）より、砂丘頂部を横走する国道1号までの平面的には約100mの範囲であったが、国道1号の北35mに存在する市道を境に南側を1区、北側を2区とした。1区は旧宅地であり、2区の上位平坦面も宅地そして斜面部は山林状を呈していた。当初、トレンチによる試掘調査を実施した結果、1区及び2区上位面については、手掘りまたは重機による発掘の限界である2.5～3mの深さまでは、砂または宝永スコリア（間層）に覆われており、遺物包含層（土質）は全く認められなかったため、砂丘上位面は本来遺跡の空白部であり、斜面部に遺跡の主体があるものとみていた。その後、砂が被覆していない居村B遺跡隣接の下位面の調査に移り、遺物分布の密な包含層を砂丘中心部（南側）に向かって掘り進めた。その結果、包含層は、斜面部で立ち上がり消滅するであろうとした当初予測に反し、傾斜を上げながらも砂丘の中腹を貫くことが判明した。そして、下位面は大木の根による攪乱により遺存が悪かったものの、砂を覆土にもつ1号溝状遺構（1M）以南の斜面部は、上位面に向かって砂の堆積を増し、それに守られるように遺物包含層（暗褐色砂質土）は良好に遺存していた。しかし、包含層を覆う厚い砂は部分的に6mを越え、上位面でも3m以上の堆積があり、その崩れやすい特性に対し、十分な法面を作りながらの作業と

なったため、調査面積は縮小せざるを得なかった。この結果、調査し得た斜面部及び上位面では、3m以上の砂層に覆われて、10C.に属される竪穴住居址をはじめ6棟以上の掘立柱建物址3基の土壇墓、2カ所の土器溜りなど、極めて良好な古代集落の存在が明らかとなった。また下位面から斜面にかけての変換部において、包含層下の砂層上部から少量の縄文時代晩期土器も出土しており、居村A及びB遺跡の出土に続き特筆される。

検出された遺構	（前ノ田）	（居村B）
竪穴住居址	1軒（2段階）	
掘立柱建物址	7棟以上	6棟以上
土壇墓	3基	
ピット	多数	多数
溝状遺構	10条以上	10条以上
土器溜り	2カ所	

以上、7C.～11C.初頭

#### 出土した遺物

縄文土器片、石鏃 晩期（新）  
 灰釉陶器、須恵器、土師器、鉄製紡錘車  
 水晶製切子玉、管状土錘、近世かわらけ

## 11. ま と め

- (1)居村B遺跡は生産址的な低湿地遺跡であり、その意味では1区の状況は前ノ田遺跡の古代集落に含めて把握されるべきであろう。
- (2)古代遺構群はその方向性に規則性を持ち、これは居村B遺跡第1次調査分にも共通しており極めて整然とした地域造りが行われたことを看取することができる。
- (3)前ノ田遺跡の調査の結果、第1次砂丘形成は縄文時代晩期以前であり、その段階の砂丘頂部の高さは現在より4m以上低かったものと考えられる。その後腐植土の堆積とともに本格的な集落が構築されたのが7C.末であり、平安時代にかけて集落の拡大がみられる。しかし10C.末に至り急激な砂の堆積を受け、集落の営みは途絶えたものと思われる。同一砂丘上の石神遺跡や東方1.6kmにある出口遺跡でも同様な状況をもつことから、広範にわたる大規模な自然災害をその原因と想定している。しかし砂の急激堆積もこの砂丘列を越えるものではなかった。

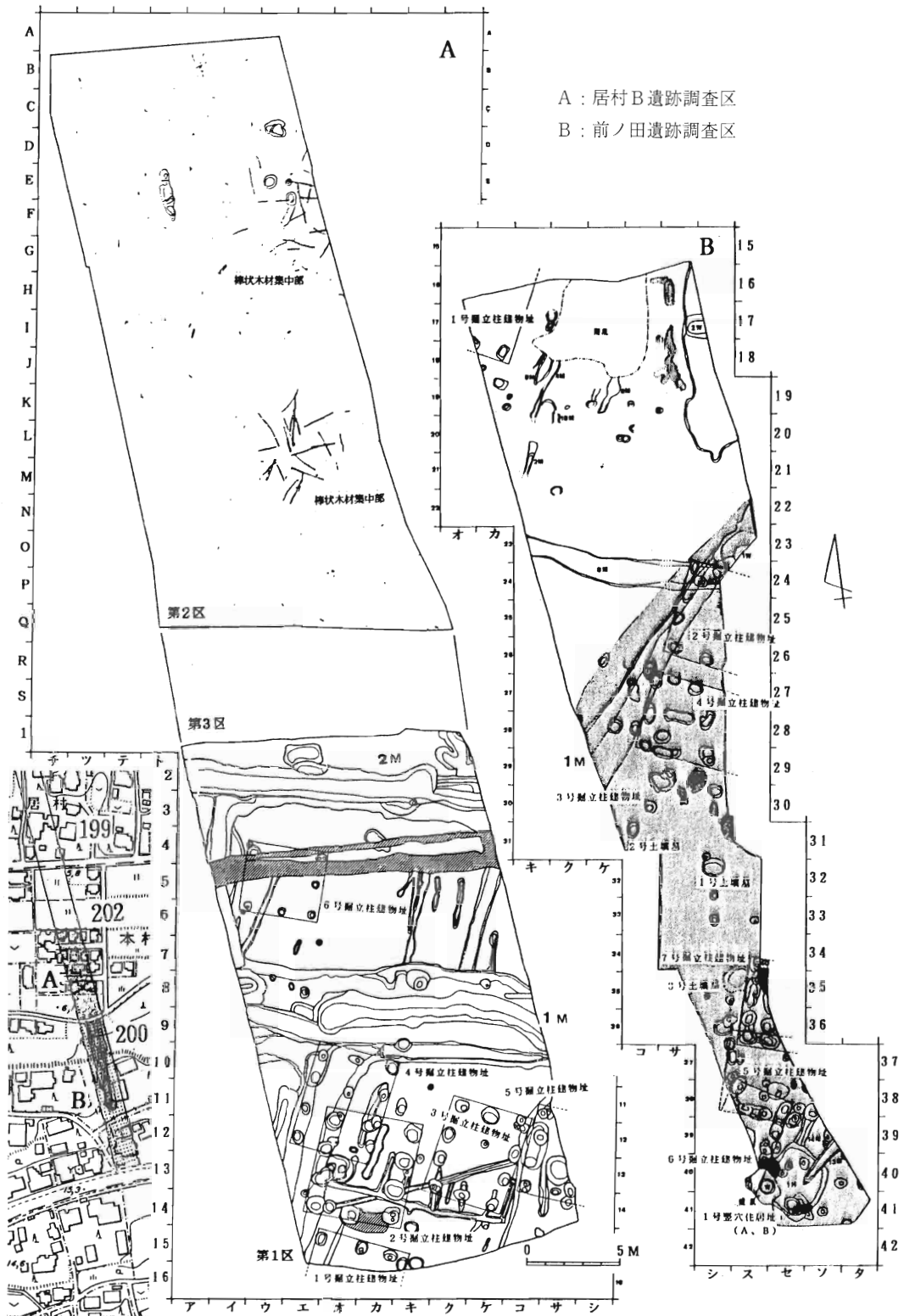
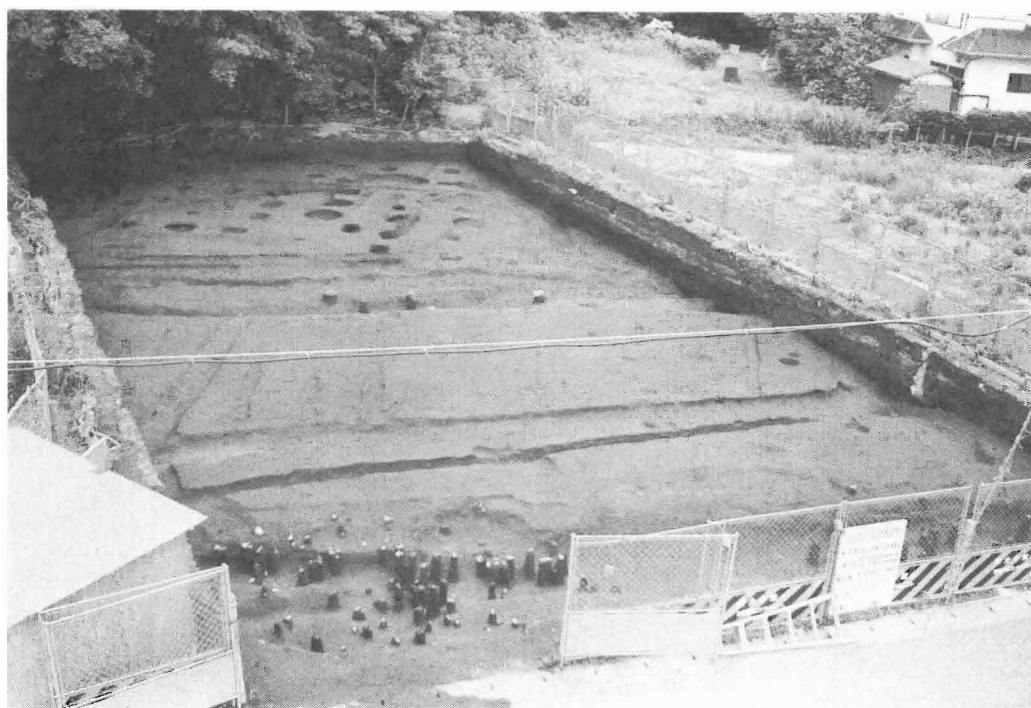


図2 遺構配置図(概念図)





前ノ田遺跡（厚い砂に覆われた古代遺構）



居村B遺跡第1区全景

## 10. 鎌倉市若宮大路周辺遺跡群

田代郁夫・原 廣志・佐藤仁彦

1. 所在地 鎌倉市小町一丁目325番イ外  
(秋月医院跡地)
2. 調査主体 若宮大路周辺遺跡群発掘調査  
団(団長 田代郁夫)  
鎌倉市教育委員会
3. 調査担当者 原 廣志
4. 調査目的 住居併用共同住宅(小町ハウ  
ス)建設に伴う事前調査
5. 調査期間 1992年11月2日~1993年3月  
31日
6. 調査面積 400m<sup>2</sup>
7. 遺跡の立地

本調査地点は、鎌倉駅の東方約250m、若宮大路二ノ鳥居付近から鎌倉警察署脇の道を東に入り、小町大路に突き当たるT字路の南西角に位置しており、宇津宮辻子幕府(1225~1236)があったと推定される区域に南接している。また、地勢的には、滑川右岸に形成された微高地端部の一角を占めている。

この付近の字名「小町口」は『吾妻鏡』にも見られ、中の下馬橋付近で若宮大路から小町大路の方へ抜ける路の入り口あたりの呼称として登場する。「小町口」には13世紀中葉に藤内定員の屋敷があったが、その位置は明らかでない。また、建長三(1251)年と文永二(1265)年の2回の鎌倉幕府追加法で、「町屋免許」を与えられた地区の中に、小町の名が登場する。和賀江島へ至る小町大路と滑川が交差するこの付近一帯は、商業地区として人や物資が盛んに集散する繁華な所であったと推測される。

周辺の発掘調査はこれまで数ヶ所で行われているが、本地点より南側で検出される遺構は、概ね14世紀に属すると考えられる方形竪穴建築址(以下方形竪穴)が卓越するのに対し、北側では方形竪穴は殆ど検出されず、一貫して掘立柱建物が専らとなる。そうした場の「境界線」は概ね二ノ鳥居を通る東西ラインであり、都市構造を解明する上で注目されている。



図1 遺跡位置図(S=10,000)

### 8. 調査の概要

調査はおおよそ3面に互って実施したが、方形竪穴や井戸など大きな遺構による土層の攪乱が著しいため、層位的な把握は困難であった。以下、発見した遺構と遺物を列記し、主要な遺構について若干の説明を加える。

#### <遺構>

**中世**…道路1条、溝7条、方形竪穴建築址29軒、掘立柱建物1棟、井戸10基、土壙約60基、柱穴約200口、特殊遺構6基

**近世**…井戸1基

#### <遺物>

**古墳時代~古代**…土師器・須恵器

**中世**…貿易陶磁(青磁、白磁、青白磁、褐釉、緑釉、黄釉、高麗青磁)・国産陶器(瀬戸、常滑、渥美、備前、東播磨、亀山)・土器(かわらけ、瓦器碗、手焙り)・土製品(馬形・轆羽口、燭台)・瓦・銭・金属製品(刀子、

釘、箸、錐)・石製品(砥石、硯、碁石、滑石鍋、滑石スタンプ、石臼、陽物形)・骨角製品(筭・サイコロ)・漆器・漆製品・木製品(箸、折敷、櫛、曲物、草履芯、下駄、鋤、仏像、独楽、円盤状製品)・その他

**近世**…陶磁器(瀬戸美濃系・唐津系他)

整理箱約150箱

**道路1**…現在の若宮大路にはほぼ直交する方向で調査区北端を東西に走る。4時期に互って土丹(シルト岩)による版築が施され、両側に木組みの側溝をもつ。幅は両側溝外縁間で2~2.5m、版築面幅1.5~1.7m、長さ22m以上。

**小町大路側溝**…調査区東辺で南北に走る。東半が調査区外になるため規模は不明だが、幅1m以上、長さ10m以上で、およそ4時期に互って重複している。最も新しい溝は鎌倉石を組み、土丹を積み上げて構築されていた。それ以前の3時期はいずれも木組みである。

**建物10**…これは市内でこれまでに検出された方形堅穴の中でも最も遺存状況が良好なもので、これによって、方形堅穴の構造をかなり明らかにし得た。建物10は4.5m四方の規模で底面に鎌倉石(凝灰岩)切石(80×45×12cm)を敷き詰め、壁にも切石を縦に2段積んでおり、壁高は160cmある。これは恐らく建物使用当時の地下部分の深さに近いものと思われる。四辺に置かれた土台は、高さ12cm・幅16.5cm・長さ410cmを測り、各辺の内側には床板をはめ込むための「板じゃくり」が施されている。床は、ころばし根太を並べ、その上に長さ193cm・幅27cm・厚さ3cmほどの板を2列にして敷き詰めていた(一部のみ遺存)。床板は土台と根太に鉄釘で打ち付けて固定される。土台上の四隅には太い隅柱(13×10cm)が、その間には約30cm間隔でやや細い間柱(約10cm角)がホゾ組みで立てられる。土台中央の中柱は隅柱とほぼ同じ太さであった。壁石に密着するように縦板と横板が張られており、それを押さえる形で間柱が細かく立つのである。さらに壁を補強するために、胴縁と呼ばれる横木を渡して内側への倒壊を防いでいたものと考えられる。床面中央には約14cm角の柱穴が切石を組んで作られ、その底部には河原石が据えられていた。棟持ち柱が立つのであろう。上屋の構造については残念ながら不明であ

るが、相当に堅牢で重量のある構造であろうことは想像に難くない。また、西辺には、東西1.3m・南北1.5mほどの張り出し部が付く。ここでも若干の敷石を検出したが、別の方形堅穴との切り合いもあって良好な状態では検出できなかった。壁石の検出状況などから見て、途中で張り出し部のみ廃棄された可能性もある。主屋部の覆土は人為的で、中層には比較的厚く炭化物が堆積していたが、建物本体が被災した痕跡は乏しい。

更に特筆すべきは、小町大路側溝に向かって暗渠の木樋が取り付けられていることである。これは主屋部との造作の相違から、建物構築当初のものではなく、途中で何らかの必要が生じて造り付けられたものと判断される。東壁の一部を壊して穴をあけ、そこから約4.5m東の小町大路西縁側溝に水が流れるように、約5度の傾斜で2本の木を組み合わせて造られた木樋が埋設されていた。主屋部内における木樋口の高さは床板上約30cmであり、その直下部の土台は10×10cmほど粗く削り取られていた。また、木樋口の内側約70cmの部分の床石が30×40cmほど不整形に削られ穴が開いている。これらはいずれも粗雑な造りで、木樋に伴う施設一集水孔か一と考えられよう。

**壺埋納遺構**…道路1のすぐ南側で、ピットの中に底部を穿孔した常滑窯の壺が正位で据えられ、その中に銭5枚と墨3個が納められていた。このような遺構の類例を求めるならば、時代はさかのぼるが、平城京などで検出されているエナ壺を挙げることができよう。残念ながら、充填土の分析はなし得ず、関連する遺構(建物址)も明らかでないなど疑問な点もあるが、これがエナ壺であるとすれば、中世に属する検出例としては極めて希少である。

## 9. まとめ

本遺跡の変遷の概要は、以下の通りである。

13世紀初頭~前葉の遺構は地勢の高い調査区西側を中心に分布し、掘立柱建物の存在が推定される。この段階では西側は低湿で未だ土地利用が希薄あるいは始まっていない。次いで、方形堅穴を規制するような区画がいつ頃成立するのかは、大きな問題であるが、南側を画する溝5の出土遺物から見て、方形堅穴が主として登場する前段階、およそ13世紀中葉に一つの画期

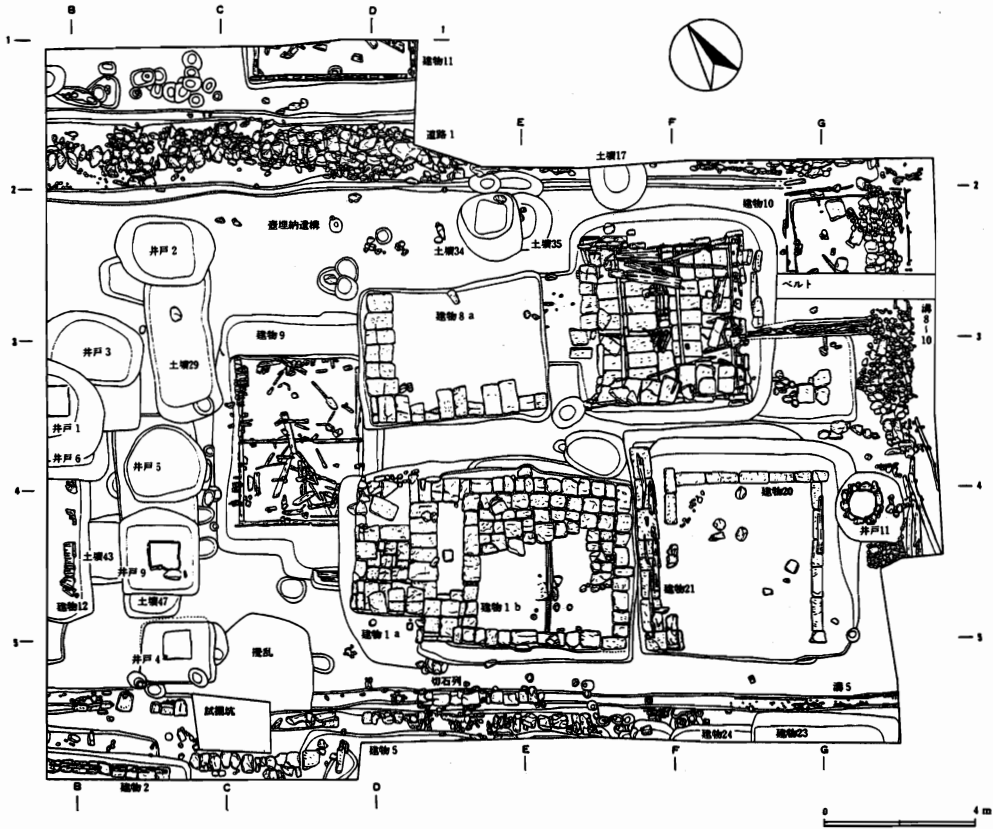


図2 遺構配置図 (S=1/200)

が推定できる。道路もこの頃に造られた可能性  
がある。方形竪穴は13世紀後葉にまず「木組み」  
が現れる。この段階では、遺存状況の問題もあ  
るが、その配置に明確な規制は見出しにくい。  
それらが、一部の同時併行は認められるものの、  
ほぼ一斉に「石組み」構造になり、配置も小町  
大路側に4軒が整然と並ぶようになる。その時  
期についてはもう少し検討しなければならないが、  
方形竪穴はおおよそ14世紀半ば頃まで存続す  
るものと思われる。なお、15世紀の遺構・遺物  
は希薄である。

本地点検出の「石組み」方形竪穴は新旧合わ  
せて10軒を数える。市内でこれまでに検出され  
た方形竪穴は767軒(本地点含む)に上るが、  
その内「石組み」のものは56軒と一割に満た  
ない。また、指呼の間にある小町1丁目322番  
地点(スポーツクラブ用地、1992.12~1993.6  
調査)でも、大略本地点に類する様相を示して  
おり(方形竪穴14軒、内「石組み」4軒。但し軸

方位は異なる。調査担当宮田真氏のご教示)、  
大きくは同一の区画として捉えられよう。とす  
れば、武家屋敷地に南接する本地点周辺に、堅  
牢な「石組み」竪穴建物が軒を連ねていた様  
が浮かび上がってくる。同様の景観は、今小路  
西遺跡(御成小学校内)にも見られる。

「石組み」方形竪穴の用途については、これ  
までのところ倉庫と見なす説が一般となりつつ  
ある。出土遺物に徴証もなく予断であるが、立  
地や構造からして、本地点の方形竪穴も、少  
なくとも「石組み」のものについては、倉庫  
の役割を担った蓋然性が高い。

今後は、こうした「石組み」倉庫群の成立  
と消滅の具体相を、都市構造全体の変遷の中  
にどう位置付けるかが、重要な課題となる。

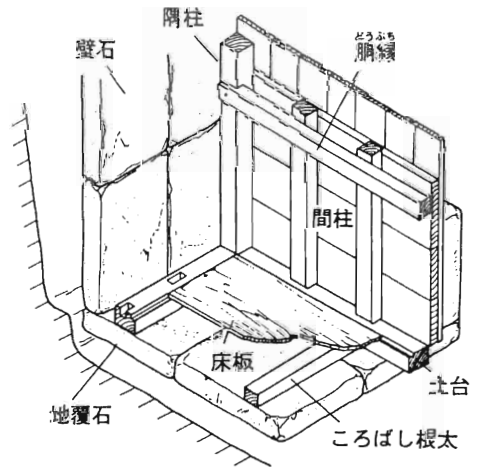
文献：佐藤他「若宮大路周辺遺跡群(No.242)小町1  
丁目325番イ外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査  
報告書10 平成5年度発掘調査報告(第3分冊)』鎌倉  
市教育委員会 1994年3月



▲ 建物全景（西から）



▲ 倒覆した南壁の間柱と胴縁



▲ 構造模式図

図3 建物10の構造

# 11. 小田原市本町小田原城三の丸堀の調査

戸田 哲也・小林 義典

## I. 小田原城三の丸堀 朝日生命地点

1. 所在地 小田原市本町1丁目4-7
2. 調査主体 小田原城三の丸堀遺跡発掘調査団 団長 戸田哲也
3. 調査担当 小林義典
4. 調査目的 商業ビル建設に伴う埋蔵文化財の事前調査
5. 調査期間 平成3年5月10日～9月10日
6. 調査面積 約350m<sup>2</sup>
7. 遺跡の立地

JR小田原駅の南東約500mの駅前に通じるメイン・ストリート西側に位置している。

周辺は小田原藩以来の行政の中心地であり、また東海道、小田原駅に近い立地条件等から明治以降は法務局、簡易裁判所・警察署等の司法関連施設及び市民会館、消防本部等の公共施設の集中する地域となっているほか、各種開業医や会計事務所等も多い住宅地となっている。

近年これ等諸施設・病院・家屋等の老朽化が進み、それに伴う建て替え工事が計画・実施されつつあり、東海道の宿場町として繁栄した当時の町並にビル化の波がおしよせ急速な変貌を見せている地域といえる。

調査地点は、現存する小田原城絵図及び1883年（明治16）の陸軍省参謀本部陸地測量部の地図から、近世小田原城の大手門北側に隣接する小田原城三の丸堀を中心とした地点であり、堀の内側は上述の大手門をはじめ御用所等の小田原藩の重要諸施設や上級武士の屋敷地が存在した地域である。

## 8. 調査の概要

調査地点は前述したように近世小田原城大手門北側に隣接する三の丸堀を中心とした地点であることが推測された。そのため本格調査に先立ち、調査区内における堀の位置・方向を事前に把握する予備発掘調査を平成3年1月31日に実施した。

その結果、南一北にはしる三の丸堀が調査範囲のほぼ半分をしめ、堀西側法面には3段からな

る石垣の存在が確認され、この石垣は上述した城絵図や地図に記載されておらず、新たな発見となった。調査地点は市街地にあり、以前の三の丸堀の調査結果及び城絵図等から堀幅18m、深さは現地表から-5m程度の規模を有することが想定されることから、調査に先立ち調査範囲の堀部分にシート・パイルを、それ以外の部分にはH鋼を打ち込み、周辺からの土砂崩落等の安全対策上の問題を解決し、本格調査を実施した。

今回の調査により発見された遺構は、小田原城大手門北側に隣接する南一北方向に延びをもつ三の丸堀である。調査区の関係から東側法面に上半部程度が調査区外となるが、西側法面には3段からなる石垣積がなされていた。

出土した遺物は石垣構築にかかわる胴木、杭のほかは、三の丸堀覆土上部から検出された多量の陶磁器類・木製品等があげられるが、これ等遺物の時期は江戸時代末期から明治・大正期である。三の丸堀は明治時代以降自然埋没状況にあり、徐々に埋没が進んだ結果、構築時からすれば、わずかな凹地として残る三の丸堀にこれ等遺物を一括したものと捉えられ、その出土遺物の雑多さから関東大震災による家屋倒壊等の復興時の所作・行為と推定することも可能であろう。

今回の調査による最大の成果は三の丸堀西側法面に3段からなる石垣積がなされた事実である。城絵図等には三の丸堀の隅部分や大手門・箱根口門等の重要部分についての石垣積の記載がなされているが、それ以外の部分には認められておらず、従来は記載のない所には石垣積が存在しないものと考えられていた。しかし、この調査による石垣積の確認により、記載なき部分にも石垣積の存在が想定されるに至った。

調査により明らかとなった三の丸堀の深さは石垣積み天端から堀底面までの最大深度が4.8m、堀底面幅は1.8mである。石垣天端の西側（堀の内側）には2～3mの高さの土塁が本来



存在していたはずであるから、構築当時の堀の深さはその分だけ深いことになる。

石垣を構築するにあたり地山層を砂層まで掘り下げ、上面を平坦に加工した松製の胴木を前後2本間隔をおいて並べ、その上に1石目をのせている。また、胴木連結部には方形のホゾ穴を穿ち角杭を打ち込む方法がとられており、小田原城二の丸中堀の技法と類似する点がある。

石垣に使用されている石材は安山岩系であり、長辺0.5～1m・短辺0.3～0.6m・高さ0.3～0.5m程度の切石であり、基本的にはそれ等を小口に積んでおり、その法面角度は仰角で70度前後であった。

さてここで問題となるのは石垣の構築時期である。三の丸堀覆土からは、その最上層から堀がほぼ埋没状態となった時期に江戸末～大正期にかけての遺物が多量に出土したものの、それ以下、特に堀底面及び最下層からの遺物が少なく決めてにかける状況であった。しかし、底面から約1.5mに1707年(宝永4)の富士山火山灰の自然堆積層(5～10cm)を確認することができ、石垣の構築時期が少なくともそれ以前と考えるに至った。

近世小田原城の城郭形成期は、稲葉正勝が入封した1634年以降1684年の正則・正通までの50年間であろうと文献資料や市教育委員会の二の丸中堀を中心とした発掘調査により解明されつつあるが、今回の三の丸堀西側法面で検出された石垣積もこの間に構築された可能性が高く、加えて胴木・石垣積の技法的特徴が類似することもそれを裏付けると考え、ここでは一応、石垣の構築年代を17世紀前半～後半と推定しておきたい。

## 9. まとめ

この調査は近世小田原城三の丸堀の調査であり、大手門の北側に隣接する地点の調査であった。三の丸堀西側法面の3段からなる石垣積を確認することができたが、今後の問題としては東側法面は素掘であったのか、あるいは西側法面同様の石垣積が存在していたのか、三の丸堀の全体像はいかなるものであったのか、小田原城にとってどのような役割をはたしていたのか等その解明にはなお大きな課題を残している。

## II. 小田原城三の丸堀 東京電力地点

1. 所在地 小田原市本町1丁目9-25
2. 調査主体 小田原城三の丸堀遺跡発掘調査団 団長 戸田哲也
3. 調査担当 小林義典
4. 調査目的 商業ビル建設に伴う埋蔵文化財の事前調査
5. 調査期間 平成3年9月7日～4年5月28日
6. 調査面積 約500m<sup>2</sup>
7. 遺跡の立地

JR小田原駅の南東約800mの国道1号線に西面し、国道を挟んで東側約100mにはかつて繁栄をほこった松原神社がある。なお、周辺は江戸期の宿場町として有名な小田原宿に隣接する地域であり、よく見れば町割等に当時の縁を彷彿とさせるものがある。

## 8. 調査の経緯

調査は東京電力株式会社小田原営業所建て替え工事に伴い実施された本格発掘調査である。

調査地点は現存する近世小田原城絵図等から大手門の南側に隣接する三の丸堀隅部北側を中心とした地点であることが推定されていた。このため、本格調査に先立ち開発範囲内における堀の位置・方向を把握するための試掘調査を平成3年6月12日に実施した。

その結果、当初の予想どおり三の丸堀が存在すること、堀の西側法面には本町1丁目4-7小田原城三の丸堀朝日生命地点と同様の稲葉時代と推定される3段の石垣積が存在することも確認された。

調査地点は、国道に面した市街地に在り、推定される堀の規模は幅約20m・深さ約5～6m程度となることから、石垣積の存在する三の丸堀西側法面部分のみを除外した「コ」の字形にシート・パイルを打ち込み、周辺からの土砂崩落防止等の安全対策上の問題を解決した後、本格発掘調査の運びとなった。

## 9. 調査の概要

調査により確認された主な遺構は上部-明治時代後半期、中部-江戸時代前半(稲葉期の三の丸堀及び西側法面石垣)～末、下部-江戸時代初頭(前期大久保期)の三の丸堀及び西側法

面野面積石垣である。

出土した遺物は明治～大正期の陶磁器類、江戸時代前半～末の陶磁器類・木器・漆器、中世末～江戸時代初頭の陶磁器・木器・漆器類である。

#### 〈明治期〉

埋没過程にある三の丸堀を埋めたとて、建物を構築した際の造成時石垣が確認された（東～西方向）。小田原市立図書館から刊行された『一枚の古い写真』小田原近代史の光と影P130～P131には小田原電気鉄道開業当日の本社前の情景（明治33）が在り、今回の調査で確認された石垣と対をなす石垣が記録されている。三の丸堀を埋めたとてその補強に石垣を構築し、その造成面に小田原電気鉄道関連の建物がつくられたと考えられる。

#### 〈稲葉期三の丸堀及び石垣積〉

調査を実施した三の丸堀部分は、小田原城絵図、1883年（明治16）地図から推測すると小田原城大手門の南側に南～北方向の延びをもつ堀であることがわかる。三の丸堀は城絵図等の記述から、堀幅平均10間（18m）程度の規模を有していたことが知られ、調査範囲の関係から東側法面の確認はできなかったものの、調査より得られた堀計測データからは、ほぼ絵図の数値に近いものと推定できた。

西側法面には3段からなる石垣が構築されている。これは前述の本町1丁目4～7三の丸堀朝日生命地点でも検出されており、後述する石垣構築上の類似点が多いことなど、これ等石垣が比較的近い時期に構築されたことを示していると推定する材料となろう。

石垣積は切石を3段に積みあげることを基本とするが河原石を使用する場合もある。石垣構築にあたり地山を掘り込んだ後、松材製の前後2本の胴木を組み合わせ、その上に石材が多量の裏栗石とともに積まれ、朝日生命地点との類似性が指摘できる。後述する前期大久保期の三の丸堀が調査区北側で折れ曲がる屈曲部（クランク）を有しているのに対し、稲葉期の堀は屈曲部をもっていないことから、稲葉期に小田原城の縄張りが変更されたことがわかる。また、前期大久保期屈曲部覆土を掘り込むか、埋め立て、この時期の胴木がすえられ石垣が積まれた

ため、この部分の石垣は胴木ごとの部分と比べ、20～30cm沈下している。

稲葉期の堀底は、前期大久保期のそれに比べ約1m高くつくられていたことが堀覆土観察から明らかとなった。また、稲葉期堀底面より約50cm上部に宝永4年（1707）の富士山火山灰の自然堆積が5～10cm程度確認でき、降灰直後の堀ざらいが行われなかったことを示すものと推定された。堀覆土の遺物としては底面から宝永降灰までの土層にくらわんか以前の陶磁器類がそれより上層となる中層～上層にはくらわんか手の磁器類等が出土した。

#### 〈前期大久保期三の丸堀及び野面積石垣〉

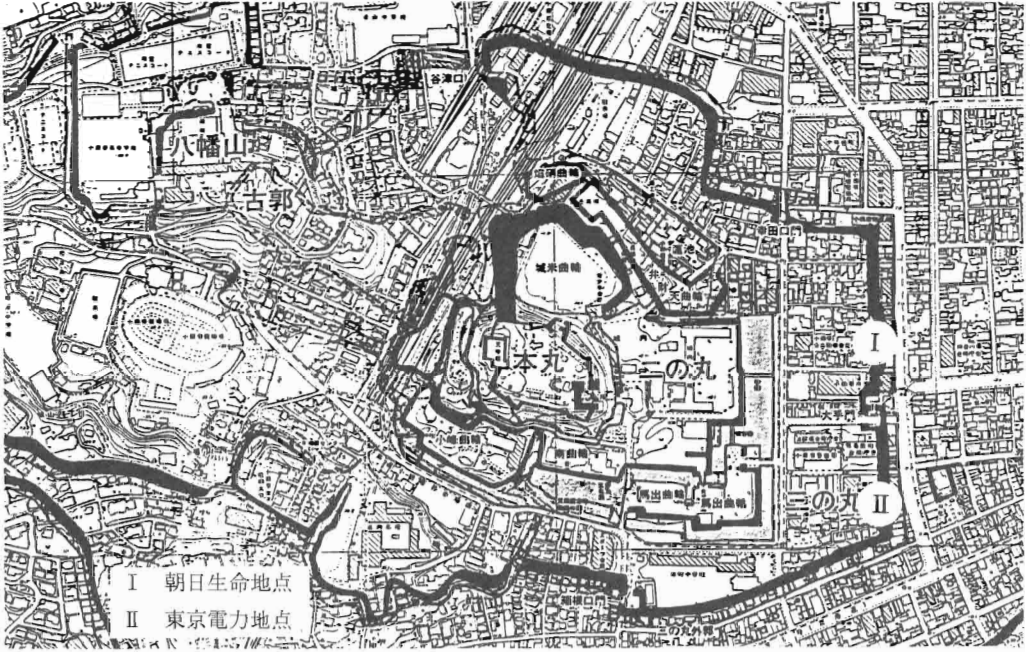
今回の調査最大の成果は該期の堀及び野面積石垣の検出といえよう。堀は調査区北西部まではほぼ南～北方向の延びをもつが、この部分で西側に曲がり、屈曲部（クランク）をつくりだしている。このクランク部は現存する小田原城原城大手門の南側に南～北方向の延びをもつ堀絵図のうちその成立年代が最も古いとされる加藤図《元和～寛永初年頃（1620頃）》にのみ記されている。

野面積石垣の隅部（屈曲部）には初期の算木積が認められ、後述する出土遺物からもこの遺構が16世紀末～17世紀初頭の所産であり、この堀及び石垣の構築は前期大久保期と推定する根拠となった。また、これまでの加藤図の資料的評価は低いもので、その信憑性に疑問がもたれていたが、この調査成果により今後の小田原地域の調査に新たな視点からのアプローチの必要性を示唆する結果となった。

野面積石垣は、根石をふくめ9石が確認されているが、裏栗石の状況から本来はさらに数石が存在していた可能性が考えられる。これを裏付けるものとして堀覆土下層に多数認められた石垣と同規模の河原石の存在が指摘でき、徳川家康・秀忠による慶長19年（1614）の小田原城破却の傍証ともなろう。

出土遺物としては、小田原編年のⅢa期16世紀末～17世紀初頭の陶磁器類が出土したほか、木製品・漆器類も認められた。なお、野面積石垣の根石に墨書きが10個程あり、人名・地名と考えられる文字が記載されている。

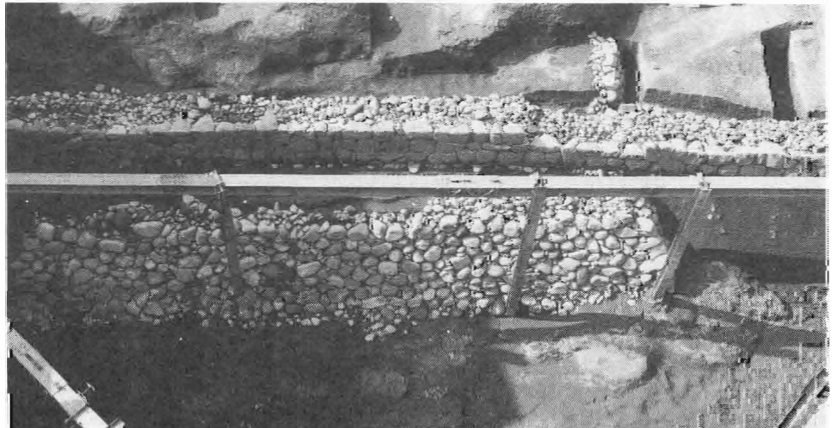




I 朝日生命地点  
II 東京電力地点



朝日生命地点



東京電力地点

---

第18回 神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨

発行 神奈川県考古学会  
編集 (財)かながわ考古学財団  
発行日 1994年9月20日  
印刷 (有)長谷川印刷

---